

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

觀音林遺跡

(第七次発掘調査報告書)



縄文時代後期土器（新例）

1989.3.20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集	1968	津軽・前田野目窯址	
第 2 集	1974	原子遺跡	
第 3 集	1975	観音林遺跡	①
第 4 集	1979	狐野遺跡	①
第 5 集	1980	狐野製鉄遺跡	②
第 6 集	1983	福泉遺跡	
第 7 集	1984	観音林遺跡	②
第 8 集	1985	観音林遺跡	③
第 9 集	1986	観音林遺跡	④
第 10 集	1987	観音林遺跡	⑤
第 11 集	1988	観音林遺跡	⑥
第 12 集	1989	観音林遺跡	⑦

序

観音林遺跡第七次発掘調査報告書を刊行できることを心からお喜び申し上げます。

国庫補助事業により、昨年7月中旬から発掘作業に当りました新谷雄蔵先生をはじめスタッフの並々ならぬご努力に心から感謝申し上げます。

埋蔵文化財である遺跡も本年度は住居跡や、500コの柱穴、繩文土器、繩文後期の新しい型の土器等古代へのロマンを搔き立てる遺物が数多く発見されまして我々現代人に大きな夢を与えてくれました。この報告書によって先人の文化を後世に伝えることができる喜びをよろこぶものであります。協力を惜しまなかつた地元や、各方面にわたる方々に衷心より感謝申し上げます。

平成元年3月

五所川原市教育委員会

教育長職務代行者

教育次長 三 上 守

例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が、昭和63年7月17～8月2日の期間に実施した「観音林遺跡」発掘調査第七次の調査結果の記録である。
2. 本報告書のうち、出土した「骨類」の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に依頼し、その結果を〔表4〕としていただいた。ここに記して感謝申上げる次第である。
3. また、焼失家屋の床面上より出土した「植物遺存体」については、日本植物学会々員木村 啓氏に同定を依頼し、同定書をいただいた。厚く御礼申上げる次第である。
4. さらに、第七次発掘調査で出土した石器・石製品の岩質鑑定は、調査員伊藤昭雄が担当し、発掘区のセクション図の作成は調査員が分担して担当した。
5. 検出した遺構の測量は、五所川原市教育委員会社会教育課、片山浩一が担当した。
6. 出土遺物の復原等は、五所川原市立、歴史民俗資料館、平山千三郎、佐藤文孝が担当した。また、出土土器等の整理、トレイス等は、荒谷順子、葛西みつ氏が担当した。
7. 出土した土器が多量なため、青森県北津軽郡金木町立、金木小学校長浅木全一氏・五所川原市役所船水寛氏が土器復原の一部を担当した。また庶務一切は、五所川原市教育委員会社会教育課、中村 健が担当した。
8. 本報告書の執筆等一切は、新谷雄蔵が担当した。
9. 出土した遺物は、すべて五所川原市教育委員会が保管し、市立歴史民俗資料館に陳列して、歴史研究の資料にする。
10. おわりになりましたが、発掘を承諾の上、種々援助を賜った地主長尾良治に感謝申上げる次第である。

目 次

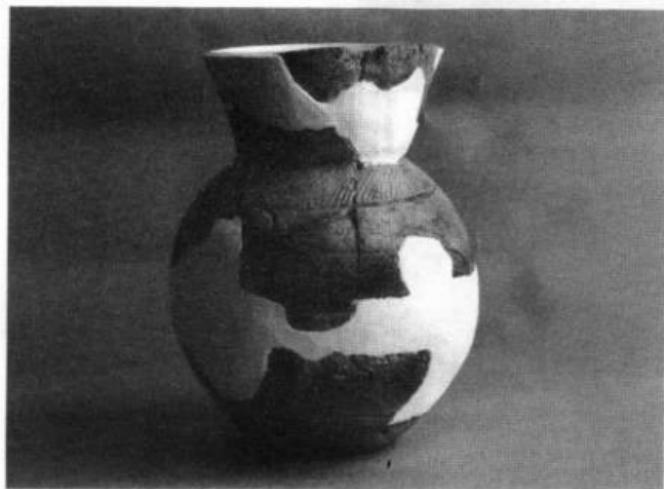
序		
例 言		
目 次		
土器写真	1	
発掘スナップ	2	
遺物（グリットの状況）の出土状況	13～14	
第1図	観音林遺跡付近地形図	16
第2図	(A)観音林遺跡・付近航空写真	17
	(B)観音林遺跡（第一～第七次）発掘調査グリット・トレンチ配置図	18
第3図	観音林遺跡（第1～7次）発掘調査グリット・トレンチ配置図-(A)・(B)	19
第4図	観音林遺跡（第7次）発掘調査区明細図	23
第5図	観音林遺跡基本層序図	25
第6図	観音林遺跡A地区斜面構成層図	25
第7図	AN2地区遺構実測図	26
第8図	観音林遺跡AN2地区遺構横断図	28
第9図	観音林遺跡AN1b-A2区遺構、遺物見取図	29
第10図	A地区Lグリット西壁セクション図	30
第11図	A地区Lグリット東壁セクション図(A)	31
	A地区Lグリット南壁セクション図(B)	31
第12図	④M-10西壁セクション図 ⑤M,N,10南壁セクション図	32
第13図	Q13グリット東壁セクション図	33
第14図	⑥M-13西壁セクション図 ⑦M,N-13南壁セクション図	34
第15図	⑧2号地床炉セクション図 ⑨1号地床炉セクション図	35
	○3号地床炉セクション図	
第16図	2号井戸南壁セクション図	36
〔I〕調査経過と調査要項	37	
(1) 第七次発掘調査に至るまでの経過		
(2) 第七次発掘調査		
①調査要項		
②グリット・トレンチの設定		
〔II〕地形・層序	45	
(1) 地形		
(2) 地質および層序		
〔III〕出土遺構	47	
(1) 第一～第六次発掘調査で検出した遺構		
(2) 第七次発掘調査で検出した遺構		

④住居址		
⑤土壤		
⑥2号井戸		
⑦地床炉		
⑧カマド址		
⑨溝状遺構		
⑩柱穴群		
(IV) 出土遺物	54	
(1) 土製品		
〔表1〕 観音林遺跡出土、土器編年表 (縄文時代土器型式編年表を含む)	55	
(2) 土器		
〔表3〕 観音林遺跡 (第七次) 出土、完形・復原土器→器形別・型式別分類表	57	
①前期・中期の土器		
②後期の土器		
●〔十腰内I式土器〕 - 第3群土器		
☆〔移行期の土器〕 - 第4群土器		
●〔十腰内II式土器〕 - 第5群土器		
☆〔十腰内II式後葉の土器〕		
③晩期の土器		
●大洞C1式の土器 - 第6群土器		
●大洞C2式の土器 - 第7群土器		
●大洞C2~A式の土器 (聖山式土器) - 第8群土器		
●大洞A式の土器 - 第9群土器		
④土師器 (环形・甕形) - 第10群土器		
⑤須恵器 (甕形・長頸〔細口〕壺) - 第11群土器		
〔表2〕 観音林遺跡出土、石器・石製品一覧表	63	
(3) 石器・石製品等	73	
〔表4〕 観音林遺跡 (第七次) 出土、骨類鑑定表	75	
(4) 骨類・鉄製品・植物遺存体 (炭火米・ヒエ)・古錢	76	
〔表5〕 観音林遺跡出土、植物遺存体 (炭火米・ヒエ) 鑑定書	78	
(V) 考 察	80	
☆参考文献	83	
○土製品 C・P・L1~2	○土 器 P・P・L80~110 (大洞A式・C2 - A式)	8~9群土器
○土 器 P・P・L1 (前・中期)	1~2群土器	
○土 器 P・P・L2~16 (十腰内I式)	3ヶタタ	
○土 器 P・P・L17~34 (第4群)	4ヶタタ	
○土 器 P・P・L35 (十腰内II式)	5ヶタタ	
○土 器 P・P・L36~51 (大洞C1式)	6ヶタタ	
○土 器 P・P・L52~79 (大洞C2式)	7ヶタタ	
○土師器 P・P・L111~120	10ヶタタ	
○須恵器 P・P・L121	11ヶタタ	
○石器・石製品S・P・L1~11		
○骨類・鉄製品・植物遺存体 (炭火米・ヒエ)、 古錢 b・P・L1~4		

〔観音林遺跡出土、土器新資料〕



（縄文時代後期の土器）



（縄文時代後期の土器）



①

☆発掘隊メンバー



② AN2 地区、発掘前のようにす。

(南方より)



③ AN1b-A2 トレンチのようす。

焼米(炭火米)・ヒエが出土した。

(東方より)

〔グリットのようす〕

写2

④ AN1b-A トレンチの南壁セク
ション



⑤ AN1b-A トレンチの東壁セク
ション



(西方より)

⑥ A 地区 C ~ F の小グリットのよ
うす。



(東方より)

〔発掘スナップ〕

写3



⑦ A地区K2 グリット



⑧ 同上



⑨ 同上

〔発掘区のようす〕

写4



⑩ A地区K2・L1グリットの発掘直前のようす。

(西方より)

⑪ 同上遠景



⑫ 遺跡北西のようす。



(南西より)

〔グリットのようす〕

写5



⑩ A地区草刈後のようす。

(西方より)



⑪ AN2 地区草刈り後のようす。

(南東より)



⑫ A地区C～F区の杭打ち後のよ
うす。

(北東より)

〔発掘スナップ〕

写6

⑯ AN2 地区N11グリットの荒掘り
初期のようす。



(東方より)

⑰ AN2 地区R12、13グリットのよ
うす。

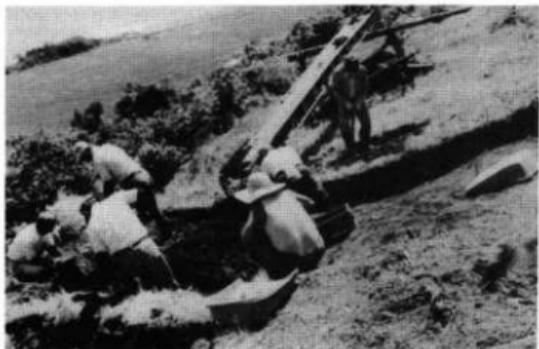


⑱ A 地区L1 グリットで、中学生
もがんばる。



〔発掘スナップ〕

写7



⑯ A地区K2・L1グリットの荒掘り状況

(東方より)



⑰ A N2 地区R13・Q13グリットのようす。

(西南より)



⑱ A N2 地区R13・R12の荒掘りのようす。

(西方より)

〔グリットのようす〕

写8



㉙ AN2 地区 Q12・R13 グリットの
精査

(東南より)



㉚ AN2 地区 Q12・13、R12・13 の
精査状況

(西方より)



㉛ AN2 地区 Q13・R13 グリットの
荒掘りのようす。

(北東より)

〔発掘完了時の各グリット〕

写9



㉙ AN2 地区M10、N10、N11の
完了時のようにす。

(東方より写す)



㉚ 同上遠景

(南方より)



㉛ AN2 地区M10・11、V層上面
の精査状況

(東方より写す)

〔発掘完了時の各グリット〕

写10



㉙ AN2 地区M13、N13グリット
の発掘完了時の状況

(東方より写す)



㉚ 同上

M13、N13グリットの状況

(東方より)



㉛ AN2 地区Q12・13、R12・13
の発掘完了時の状況

(東方より)

〔発掘完了時の各グリット〕

写11



㉙ A N 2 地区O 12、13の状況

☆ 中央は、2号井戸

(東方より)



㉚ M 12・13、N 12・13のようす。

(東方より)



㉛



☆ ㉜、㉝は、5号住居址のようす。

㉝

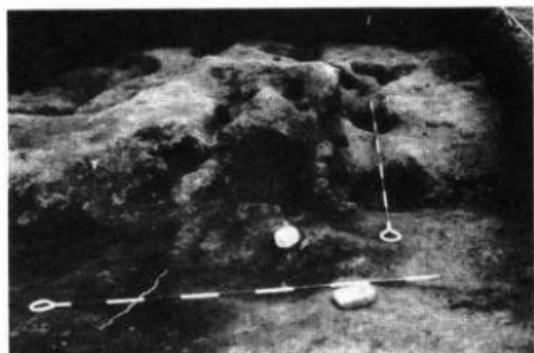
〔カマドのようす〕

写12



⑤ AN2 地区 Q11V 層上のカマド
のようす。

(上方より)



⑥ AN2 地区 Q11V 層上面のカマ
ド址

(北方より)

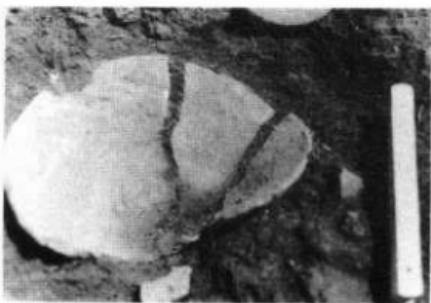


⑦ 同上

(南方より)



(AK2 II)



(AL1 II)



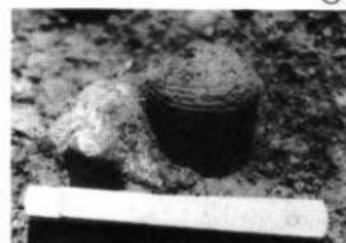
(AN1 b-B1 II出土)



(AN1 b-B1 II)



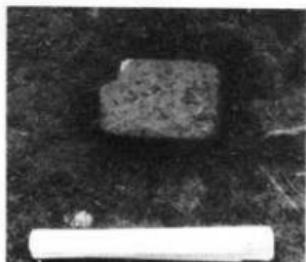
(AK2 III)



(AK2 III)



(AK2 III)



(AN1 b-B1 II)



(AN1 b-B1 II)



(AN1 b-B1 II)



(AK2 III上)

⑤〇



(AK2 III)

④〇



(AL2 II)

⑤〇



(AL1 III)

⑤〇



(AN1 b-B1 II)

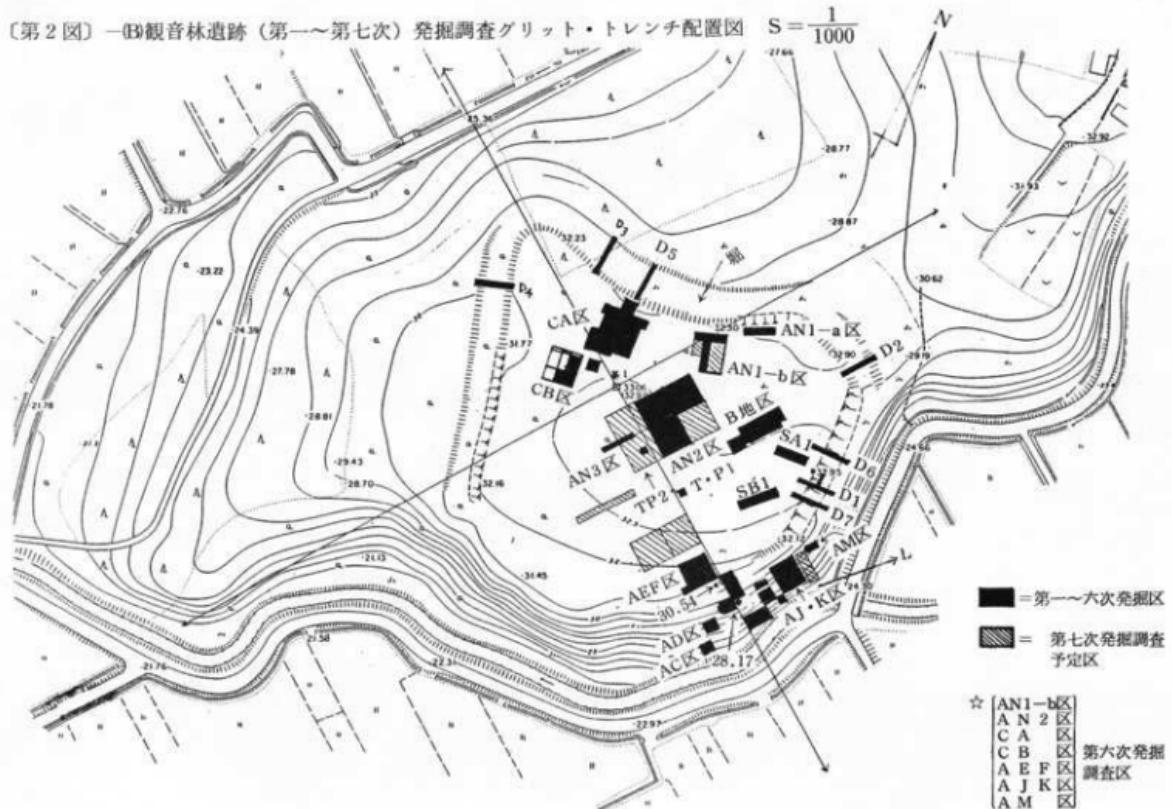
〔第1図〕銀杏林遺跡付近地形図



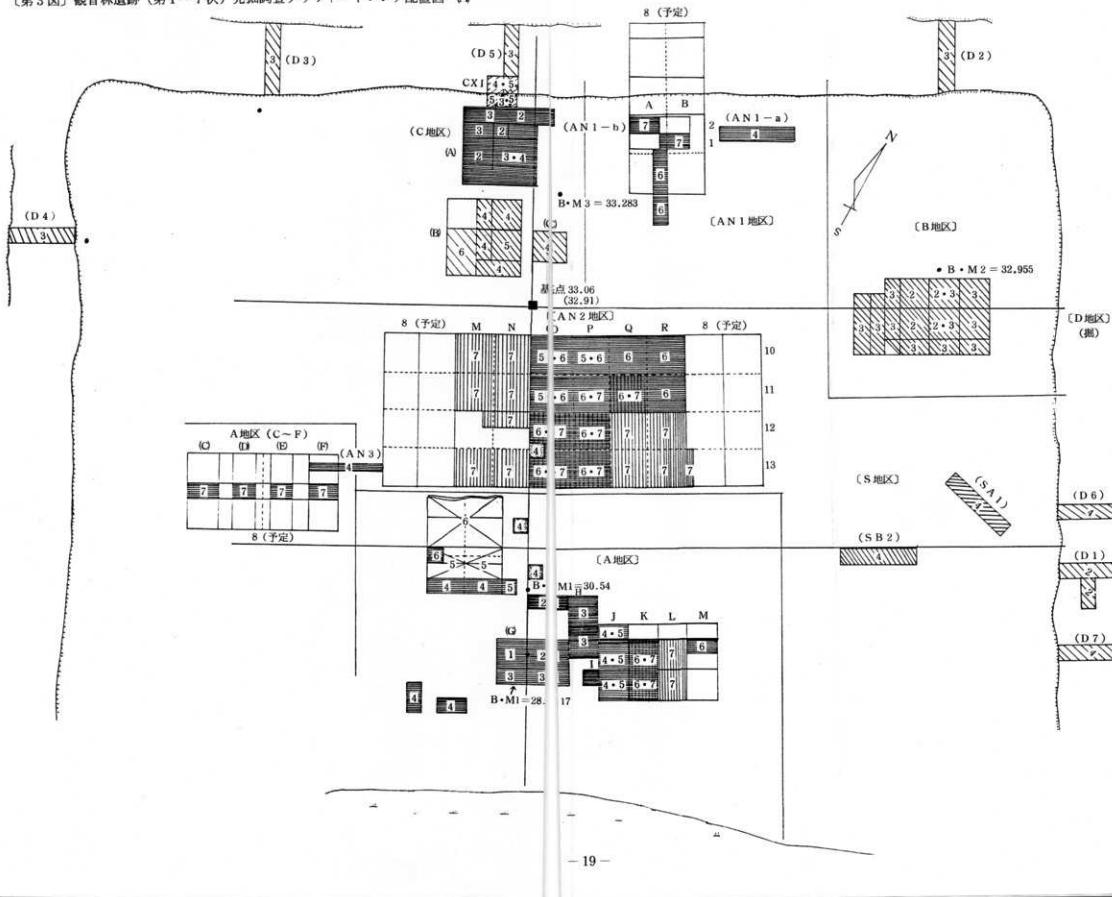
〔第2図〕—(A)觀音林遺跡・付近航空写真 約 $\frac{1}{1000}$



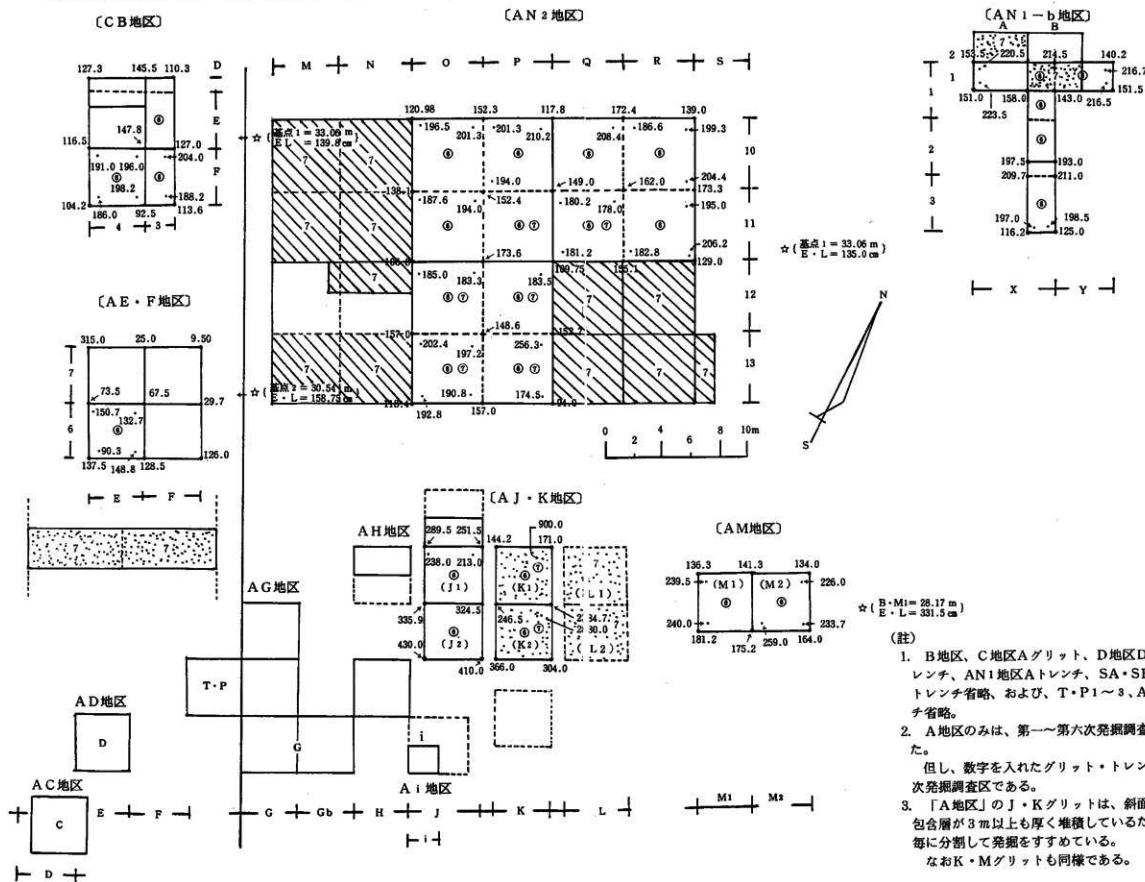
〔第2図〕—①観音林遺跡（第一～第七次）発掘調査グリット・トレチ配置図 S = $\frac{1}{1000}$



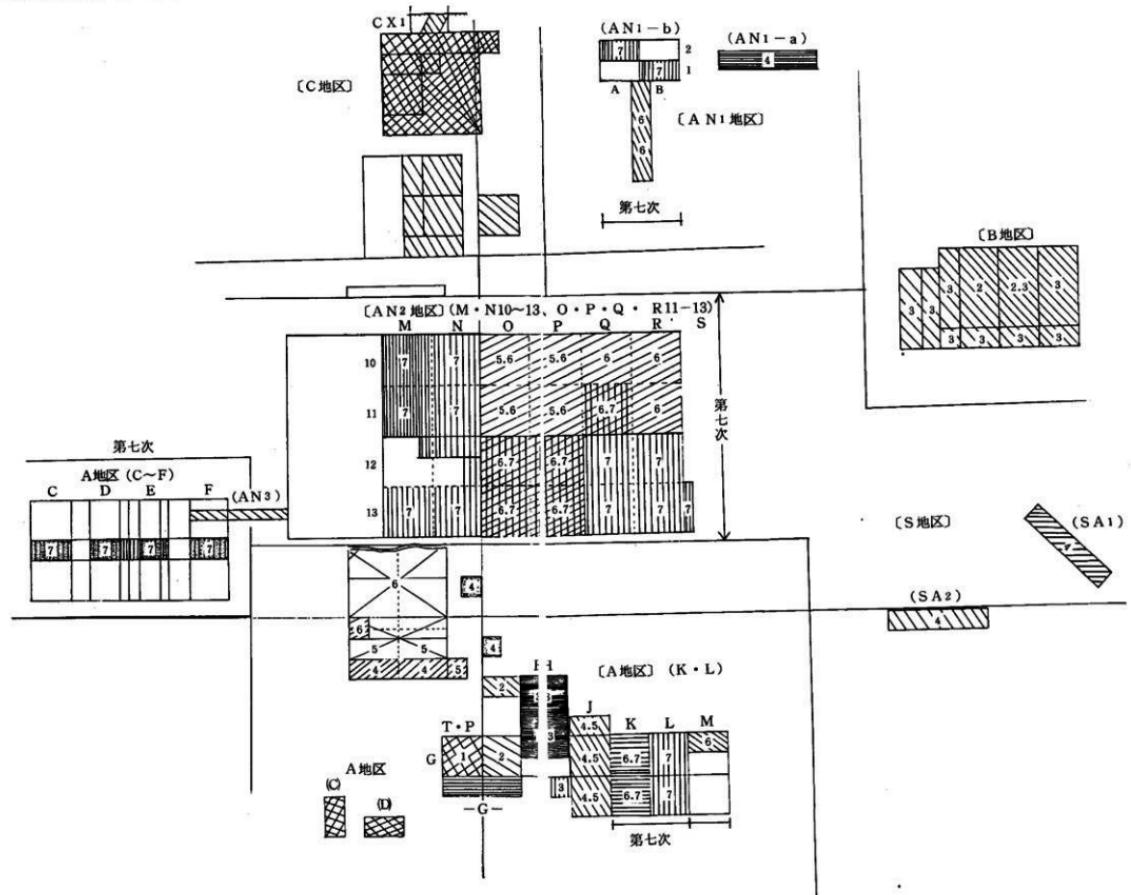
〔第3図〕観音林遺跡（第1～7次）発掘調査グリット・トレンチ配置図-Ⓐ



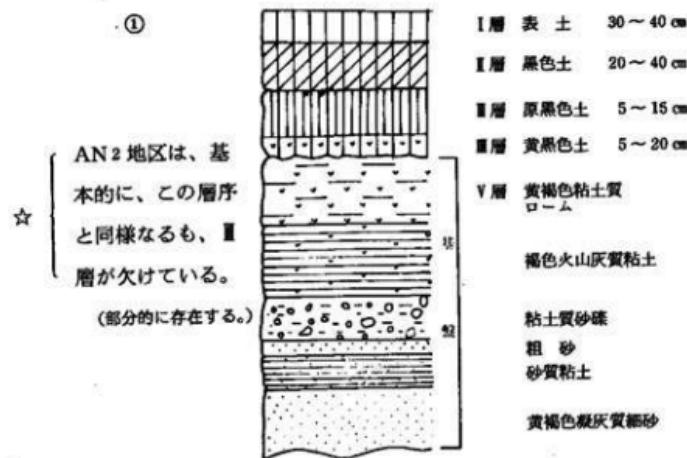
[第3図] 銀杏林遺跡(第1~7次)発掘調査グリット・トレンチ配置図(II)



〔第4図〕観音林遺跡(第7次)発掘調査区明細図



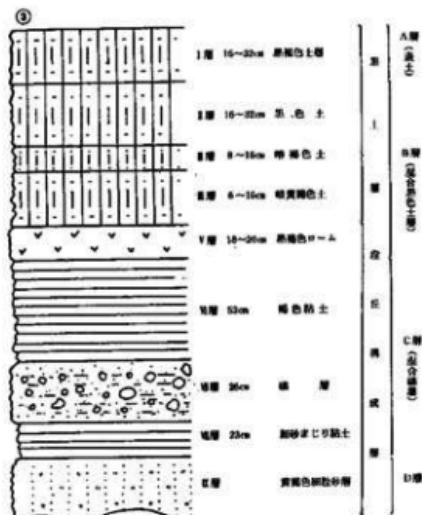
〔第5図〕観音林遺跡基本層序図



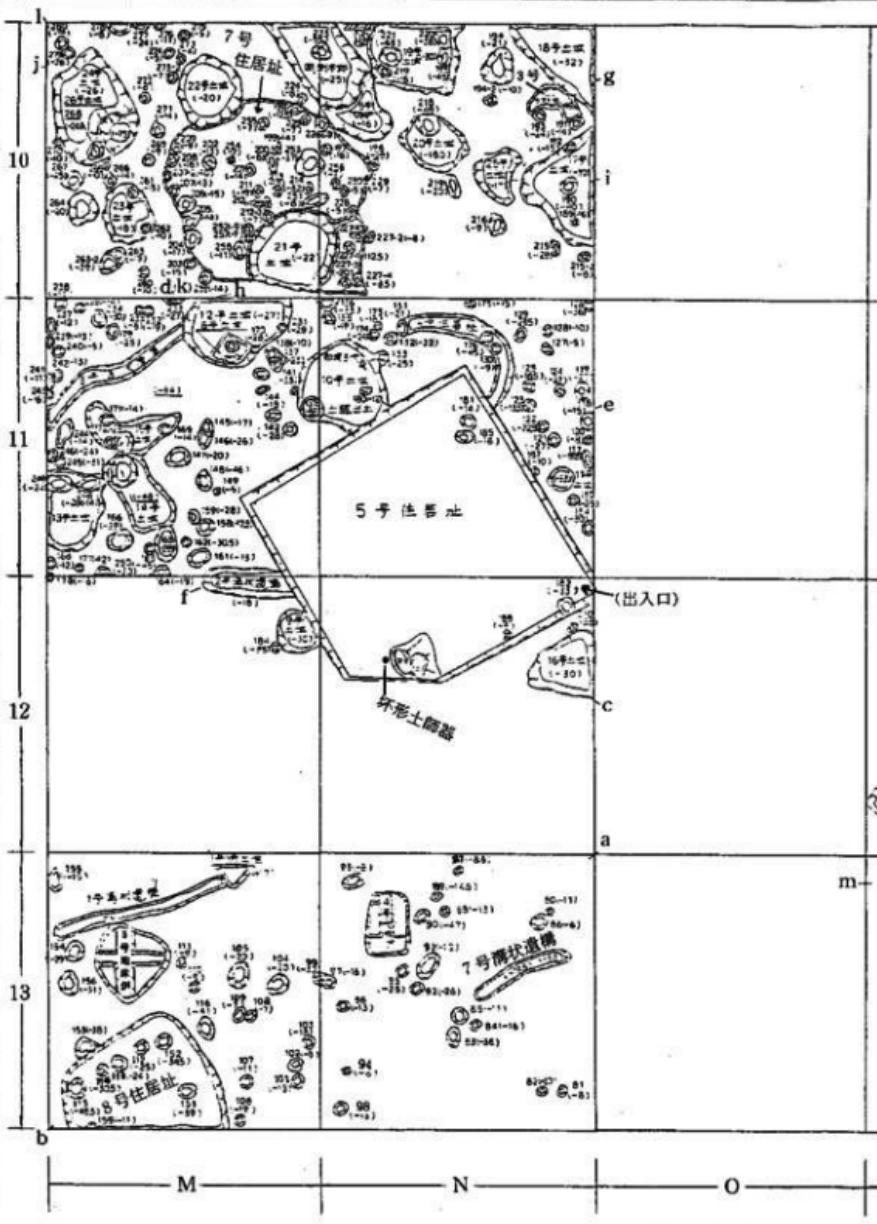
〔D地区堀状遺構基本層序〕

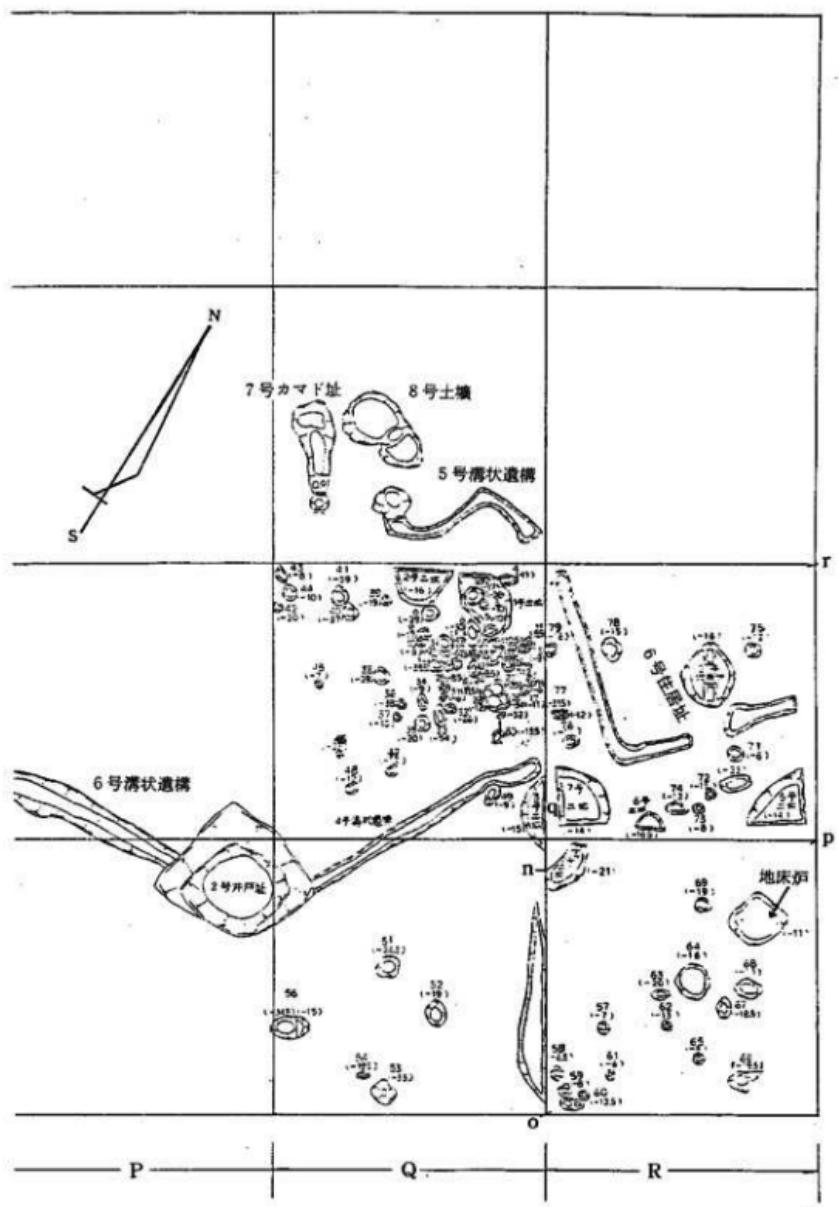


〔第6図〕A地区斜面構成層図

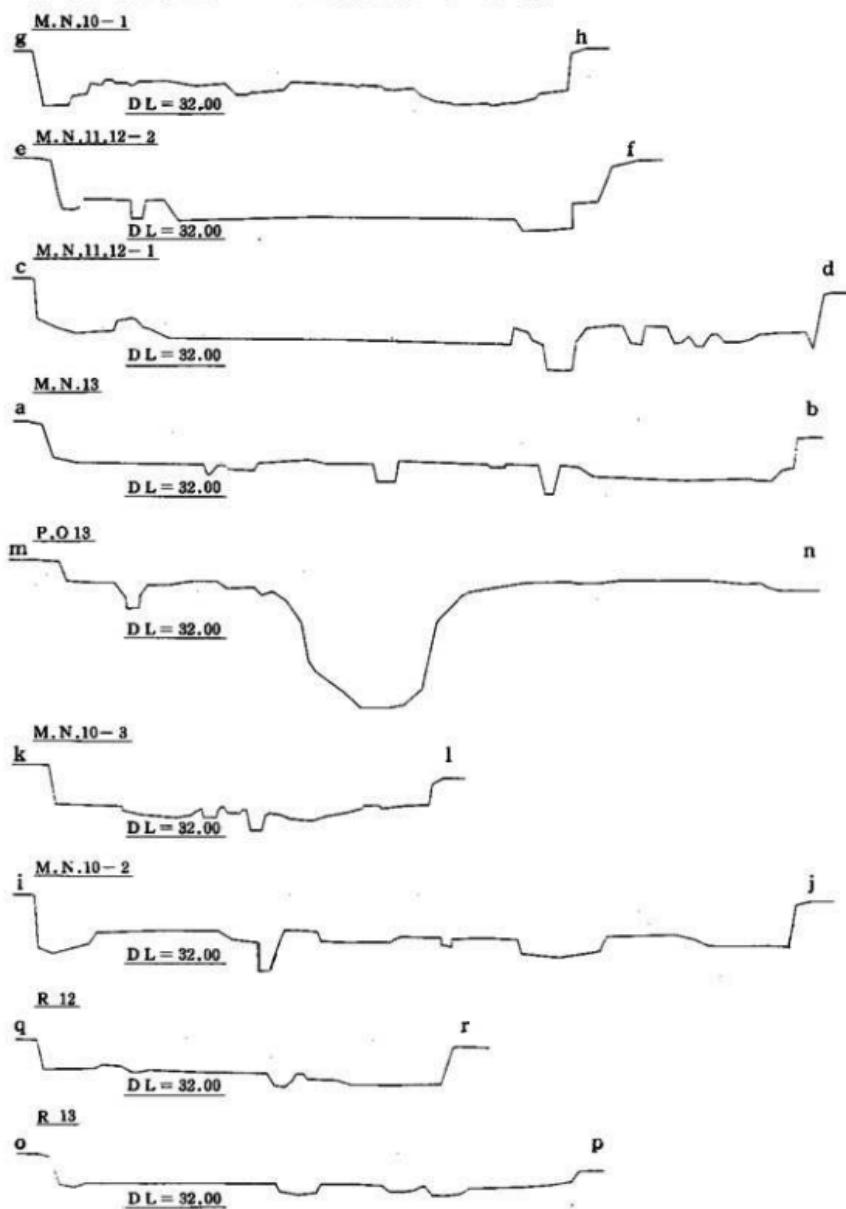


(第7図) AN2地区遺構実測図



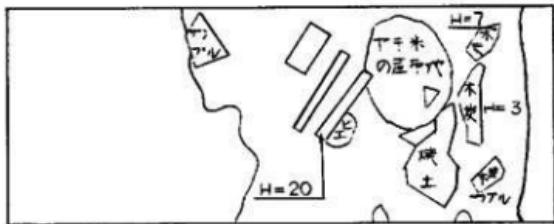


〔第8図〕 銀杏林遺跡AN2地区遺構横断図 S = 1 : 20

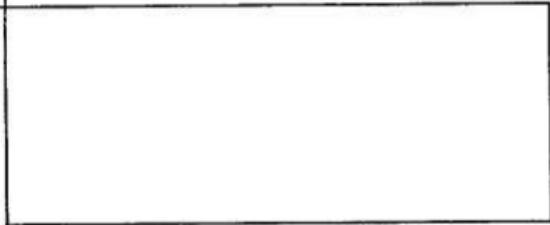


〔第9図〕 AN1b-A・B tr 見取図 S=1/50

AN1b-A2 トレンチ



AN1b-B1 トレンチ



(第10図) A地区Lグリット西壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

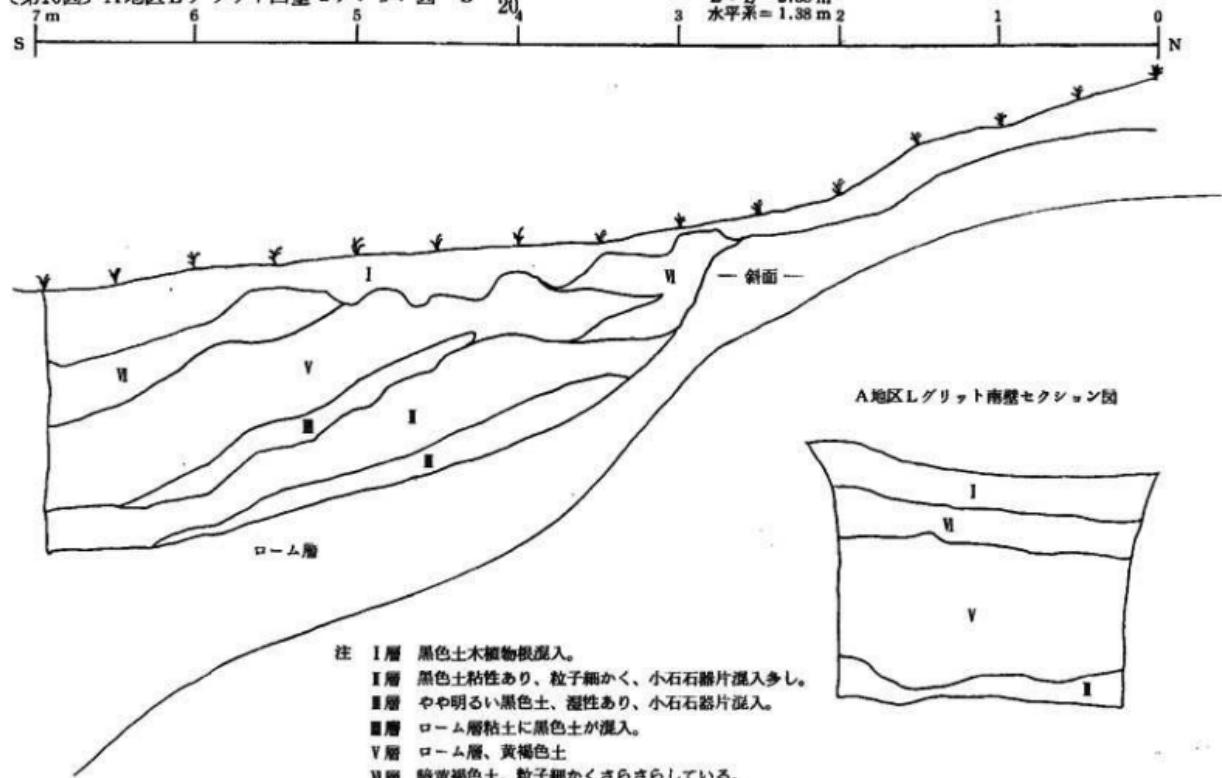
B+M1 = 31.605 m
E + L = 2.38 m
水平系 = 1.38 m 2

3

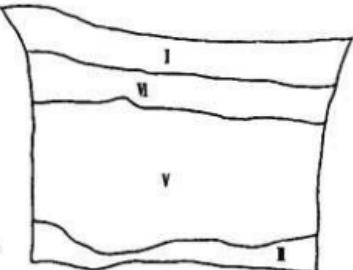
1

0

- 30 -

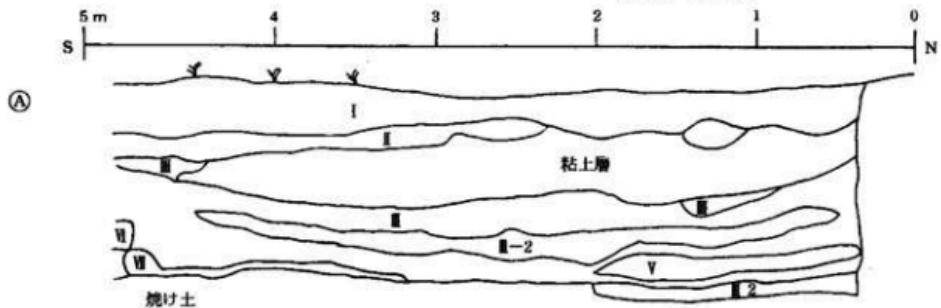


A地区Lグリット南壁セクション図

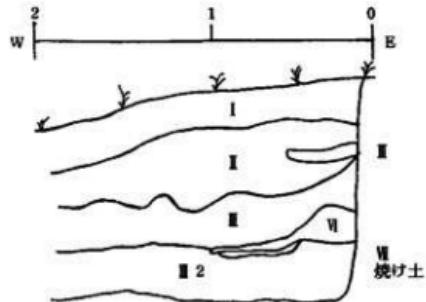


(第11図) A地区レグリット東壁セクション図 S = $\frac{1}{20}$

B+M1 = 31.605 m
E + L = 112.0 cm
水平系 = 134.0 cm



(B) A地区レグリット南壁セクション図

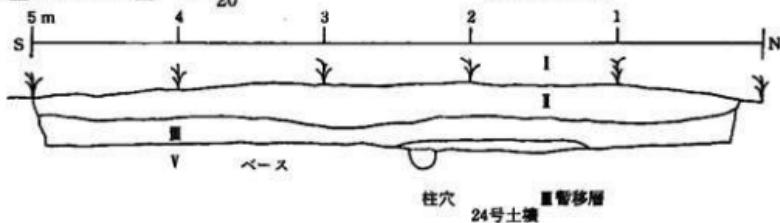


- 注記
- I層 表土茶褐色土、草木根、礫の混入
 - II層 茶褐色土粘性あり
 - III層 暗茶褐色土 III-2 原黒色土粘性混性あり
 - IV層 IV層土に粘土レキ混入
 - V層 V層土に焼土、石混入
 - VI層 VI層シラス茶褐色土の混入層
 - VII層 焼土

〔第12図〕 A・B

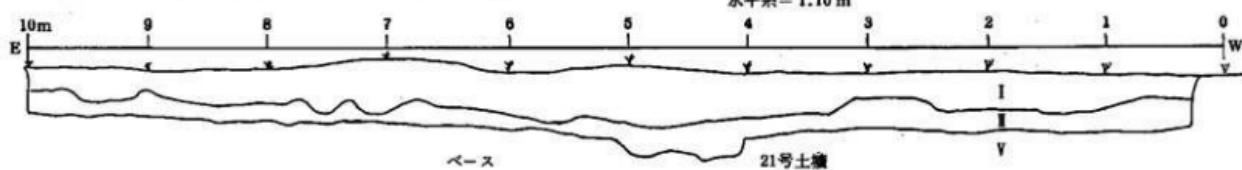
Ⓐ M . 10 西壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

B・M3 = 33.283 m
E・L = 1.29 m
水平系 = 1.10 m



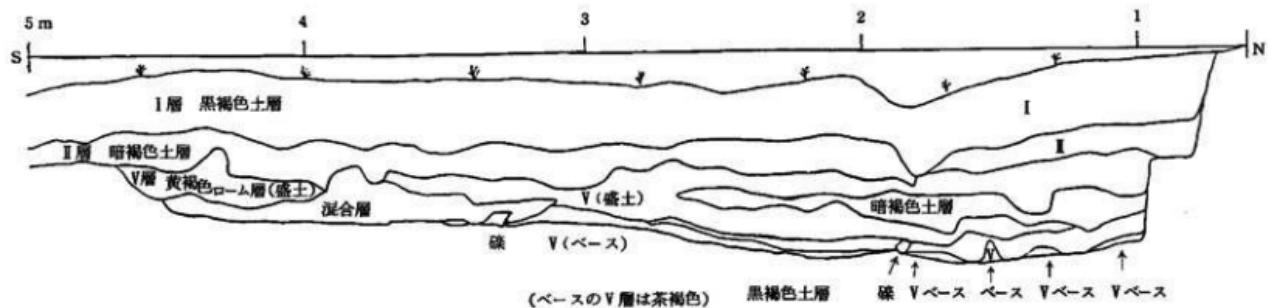
Ⓑ M . N . 10 南壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

B・M3 = 33.283 m
E・L = 1.29 m
水平系 = 1.10 m



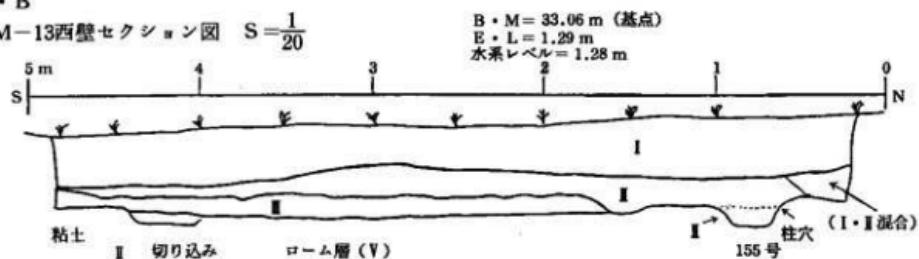
〔第13図〕 Q13グリット東壁セクション図 S = $\frac{1}{10}$

B + M = 33.06 m (基点)
E + L = 1.12 m
水平系 = 1.13 m



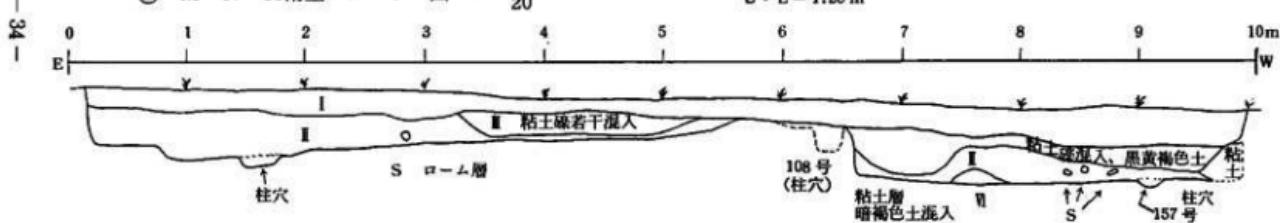
〔第14図〕 A・B

Ⓐ M-13西壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$



Ⓑ M・N-13南壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

B・M = 33.06 m (基点)
E・L = 1.28 m



注記 第5図参照

〔第15図〕

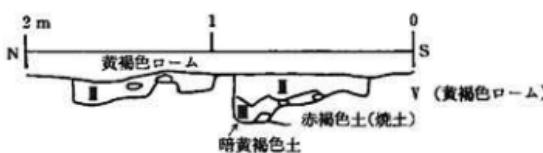
Ⓐ 2号地床炉セクション図 $S = \frac{1}{10}$ (R . 12グリット)

B・M = 33.06 m (基点)
E・L = 1.225 cm
水平系レベル
水平系走向 N 6° W



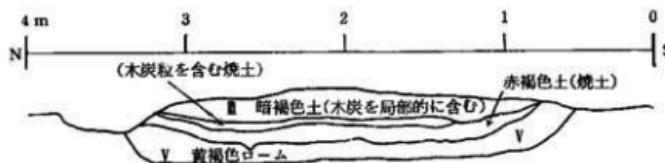
Ⓑ 1号地床炉セクション図 $S = \frac{1}{10}$ (R . 13グリット)

B・M = 33.06 m (基点)
E・L = 1.255 cm
水平系レベル = 162.0 cm
水平系走向 N 58° W



Ⓒ 3号地床炉セクション図 $S = \frac{1}{10}$ (M . 13グリット)

B・M = 33.06 m (基点)
E・L = 125 cm
水平系レベル = 178 cm
水平系走向 N 30° W



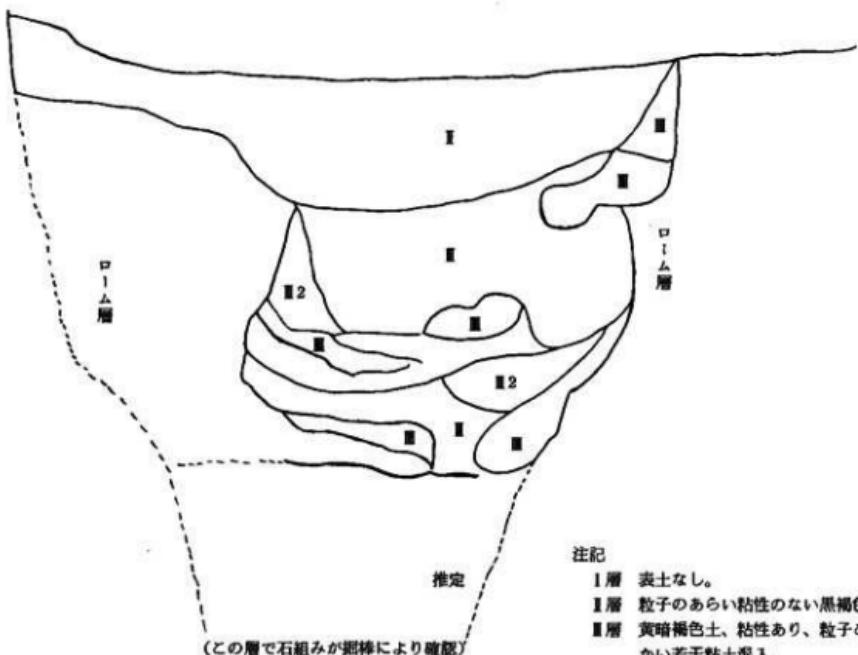
黄褐色上 (下位層のⅤ層とは漸移関係)

↓ロームが熱によって変質したものである

☆ (AN 2地区の模式層序中のⅢ層を欠いている) → (基本層序①参照)

(第16図) 2号井戸南壁セクション図 $S = \frac{1}{10}$

B・M 33.06 m (基点)
E・L = 122.0 cm
水平系 = 147.5 cm



注記

- I層 表土なし。
- I層 颗子のあらい粘性のない黒褐色土
- I層 黄暗褐色土、粘性あり、粒子こまかい若干粘土混入。
- II層 黄灰黑色土、やや粘性あり、粒子はこまかい。
- II層 暗赤褐色土、粘土質で粒子こまかく粘性あり。

〔I〕 調査経過と調査要項

（1）第七次発掘調査に至るまでの経過

●観音林遺跡は、昭和49年度に第一次試掘調査が行なわれ、わずか $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ の試掘区（A地区）から、縄文時代晚期の土器群が大量に出土した。（ 1.5 m^2 拡張区あり）

これらの土器は、大洞C2式土器が主体で当遺跡が縄文時代晚期の一大遺跡であることが判明した。

・その後、昭和58年度になって、地主である長尾良治氏の御好意により、近い将来において開発計画があるとの連絡があったため、五所川原市教育委員会では、発掘調査の計画を策定し、第二次発掘調査を実施した。

・第二次発掘調査は、遺跡の所在する舌状台地を、A地区（南斜面）、B地区（遺跡の東部）、C地区（遺跡の北部）、D地区（堀状遺構）、中央区（台地の中央部）の各区に分け、A地区、B地区、C地区およびD地区の側辺を調査区として選定し発掘調査した。

すなわち、遺跡の中央部を残し、東・南・北の三側辺を調査することにした。

●第二次発掘調査では延べ 163.8 m^2 を発掘したのであるが、第二次調査における各地区的状況を簡略に述べる。

〔A地区〕 →この地区は、縄文時代晚期の遺物が出土する地区である。出土土器は大洞C2式土器を中心に、晚期B・BC、C1、C2、A式土器が出土した。

〔B地区〕 →この地区では、土壙群が出土した。土壙群のうち1基は縄文時代晚期のもので、他の8基は縄文時代後期のものである。

これらの土壙内外から獸骨片（ニホンシカ・イノシシ等）や鳥骨（ガンカモ）が出土し、いずれも焼骨であることが注目される。

〔C地区〕 →この地区からは、カマド址が検出され、さらに住居址壁面の一部を検出した。すなわち、この地区では、「東北北部の土師器型式」第二型式の土師器を伴う歴史時代（平安期）の遺構が出土した地区である。

〔D地区〕 →この地区は、既述したように、空堀の状態を調査するための地区である。

D地区では、D1トレンチを一本（ $1\text{ m} \times 12\text{ m}$ ）堀を切って東西に堀る、その結果堀の形態が特異なため、明年度さらにトレンチを入れ確認することにする。

以上が第二次調査の概要である。

●第三次調査は、昭和59年度に252m²を発掘調査した。その概要を述べるとつきのとおりである。

〔A地区〕→この地区は、第一次・第二次・第三次調査をとおして縄文時代晚期の遺物が多量に出土する。第三次調査においても同様であるが包含層が約3mもあって、これだけの厚さを持つ包含層がある以上、台地上の平地に縄文時代晚期の住居址が存在する可能性が予測される。

〔B地区〕→ここでは、小土塁に囲まれた5角形に近い遺構が出土した。この土塁は、第二次調査の項で述べた土塁群を囲んで出土した。また土師器が出土する小土塁1基を検出する。

〔C地区〕→この地区では、第二次調査で検出した、カマドを備えた一号住居址（平安時代後葉）の西半分を発掘するも、I・II層が深く、東半分は明年度に発掘することにする。

〔D地区〕→さきに述べたとおり、D1トレンチによる堀の形態が特異であったため、D2～D5のトレンチを4本南北、東西に堀を横切ってトレンチを設定（1m×12）して掘る。

その結果を検討すると觀音林遺跡に所在する空掘は、箱型掘りであると結論づけた。

●第四次発掘調査は、昭和60年度に実施、発掘面積は212m²である。

第一次～第四次調査は予備調査としての最終段階である。

〔A地区〕→さきに述べたとおり、この地区は南斜面で遺跡の中央南端に位置する。包含層は深く、第四次調査では、約1mの深さまで発掘した。（I・II層→表土、黒土の上半）このII層の黒土は、二次堆積層であるが、縄文時代前期・中期・後期・晚期、土師器・須恵器が混在する。

すなわち、晚期のものが層序の下位に、後期のものが上位に多く、さらに土師器・須恵器、前、中期の土器が混入する状態である。

しかしながら、主体を占めるものは、縄文時代晚期大洞C2式土器である。（正常な地層では、古いものが下位に、新しいものは上層に包含するのが普通である。）

のことから、台地の中央部は平坦地をなしており、台地中央部を削平して、その黒土を南斜面・北斜面に二次的に移動させたこと、および遺跡の南端は急斜面をなしていたことによるものと考えられる。このことは、C地区の層序からも推定でき、中央部に黒土層が殆んどなく、Ⅴ層に30~40cmの深さで達することからも裏付けられる。

〔C地区〕→この地区では、歴史時代の井戸を1基、3号住居址のカマドと壁面の一部、および、2号住居址の柱穴と溝状遺構を検出したが完掘せず。

〔中央区〕→予備調査の最終年度として中央区の一部を発掘した。すなわち AN1トレンチ、SA1, SB1トレンチである。(2m×10m)

また、舌状台地の中央部に南から北へ、T・P1, TP2, TP3(2m×2m)を設定発掘した。

その結果、SA1, SB1は遺物の出土ではなく、AN1トレンチは、縄文時代後期の遺物が多量に出土することが確認された。

また、T・P3において遺構が存在することが確認できたのである。

●第五次発掘調査は、以上第一次~第四次調査の予備調査を受けて、本格的な調査の第一年次である。五所川原市教育委員会では、この本調査を昭和63年まで続ける計画であるが、3ヶ年では全面調査は無理であろう。第五次~第六次発掘調査の推移を検討しながら、第2期発掘計画を策定する必要があろう。

以下、昭和61年度に実施した第五次発掘調査の状況を簡略に述べる。

第五次発掘調査(本格的調査第一年次)では、計406m²を発掘調査した。

本格的発掘調査3ヶ年計画の第一年目であるため、第一~第四次調査にわたる試掘調査と予備調査の結果について再検討を加え、あわせて疑問として残った問題点を解明する必要があったのである。

いま一つは、予備調査においては意識的に台地中央部をさけ、遺跡の北・東・南の三方向より遺跡の周辺地区を調査対象として発掘を進めて来たのであるが、本年度からは遺跡の中心部に発掘区を設定する手がかりを把握する必要があった。

すなわち、第一~第四次調査の総括と本格的調査への第一年度としての発掘区を選定する必要があったのである。

そのため、第四次で発掘した、A地区のE5・F5 J・Kグリット。C地区ではAグリッ

ト、X1グリット、Bグリット。遺跡の中央では、AN1・AN3・SA1・SB1のトレーナー、およびT・P1・T・P2・T・P3の各区を対象とし、これらの発掘区において検出した遺構の完掘とその究明が必要であった。

なお、このうち、SA1・SB1・T・P1・TP2には、遺構・遺物等の出土はなく第五次調査では除外した。

他の各区では、遺物・遺構の存在を認めたので、このうち、C地区A・Bグリット、T・P3を含めたAN2グリット、A地区のJ・Kグリット、E5・F5の各グリットを設定して発掘した。

その結果、C地区では、住居址1・2号・1号井戸、およびAN2地区では柱穴群と土壙、A地区では、大量の後期・晩期の土器群が混合層に含まれて出土した。

以上の結果を得たのであるが、A地区のJ・Kグリットの包含層は厚く、さらに掘り下げが必要であった。また、A地区的E5・F5グリットには柱穴群が検出され遺構の存在が予測できた。さらにAN2地区では柱穴、土壙が認められたので拡張して調査する必要があったのである。

●第六次発掘調査は、昭和62年度に実施した。第六次発掘は、第一期発掘調査の2年目である。発掘面積は481m²で、遺跡の中心部に主力を置くことにした。

すなわち、〔A地区〕→E5・M1・M2、J1、J2、K1、K2。〔AN2地区〕→O・P・Q・R～10～13、および、〔AN1b地区〕→X1、X2、Y1、Y2の各区である。

既述のように、この調査では、遺跡の中央部である〔AN2地区〕に主力をおき、他の各区は、補強的な意図を持って発掘を進めた。

この第6次発掘調査で検出した遺構は下記のとおりである。

- ① 土 壙 群 - AN2 地区 → 32基
 - ② 住 居 址 - AN2 地区 → 3・4号住居址
 - ③ カマド址 - AN2 地区 → 5基
 - ④ 柱 穴 群 - AN2 地区 → 240箇所（但し土壙と重複するものあり。）
- また、出土した遺物の主なものを列挙すると下記のとおりである。
- ① 土製品 → 土偶・三角形土製品・異形土器。
 - ② 土器類 → 円筒下層、上層、十腰内I・II、大洞B・C、C1、C2、C2-A（仮称）A、

土師器・須恵器。

③ その他→鉄器、骨類等。

④ 石製品・石器→278点

これらの遺構・出土品等については、第1～第6次発掘調査報告書に述べてあるので詳細は省略する。

(2) 第7次発掘調査(第3・4回)

① 調査要項

・調査目的→個人の所有地内に所在する遺跡であるため、所有者の開墾計画によって消滅する恐れがある。そのため事前に発掘調査を実施し、記録の保存と遺物の保存活用を図る緊急発掘調査である。

・調査期間→昭和63年7月14日～8月2日

・整理期間→昭和63年9月1日～平成元年3月20日

・遺跡名→観音林遺跡

・所在地→青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地

・調査面積→(444m²)

・A地区→K1, K2 (4m×8m=32m²)

L1, L2 (4m×8m=32m²)

・A地区→C～F (2m×3m, 2m×2m, 2m×2m, 2m×3m)=20m²

・AN2地区→M10, 11, 12, 13…… (5m×5m, 5m×5m, 5m×5m)=75m²

・AN2地区→N10, 11, 12, 13…… (5m×5m, 5m×5m, 2m×3m, 5m×5m)
=81m²

・AN2地区→Q11…… (5m×5m)=25m²

・AN2地区→O12, 13, P12, 13…… (5m×5m, 5m×5m, 5m×5m, 5m×5m)
=100m²

・AN2地区→R12, 13, S13…… (5m×5m, 5m×5m, 1m×5m)=55m²

・AN1b地区→A・B…… (2m×4m, 2m×4m)=16m²

・発掘区外→YZ (2m×4m)=8m²

☆発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 高橋 清徳

☆主管課 五所川原市教育委員会 社会教育課

○課長 寺田 勇

○課長補佐 小野哲弘

○係長 中村 健

○主査 片山 浩一

○ク 小田桐 由美子

市立歴史民俗資料館

○館長 平山 千三郎

○主任 佐藤文孝

☆発掘担当者 ○日本考古学協会々員 新谷 雄藏

☆調査員 ○北奥文化研究会々員 永沢秀夫

○ク ク 小山英治

○ク ク 太田文雄

○ク ク 伊藤昭雄

○ク ク 山川夏子

○ク ク 菊池由紀子

☆参加児童・生徒

小泊中学校 3名

南小学校 1名

松野木小学校 1名

⑥グリット・トレーニングの設定（第3・4図）

・A地区K1・2, L1・2→K1・2は、東西4m、南北8m、L1・2は、東西4m、南北8mとして設定した。このうちK1・2グリットは第六次においても分層発掘したグリットである。

L1・L2グリットは、K1・2グリットの東側に第4図に示すとおり設定した。

このK、Lグリットは、台地の南斜面に位置しており、堀に囲まれた館址の開口部に設定したものである。

・K1・2グリットは、第六次発掘においても発掘調査したグリットであるが、包含層が約3m程もあるため第七次においても発掘する必要があった。

・L1・2グリットは、本年度新らしく設定したグリットである。

このL1・2グリットは、前年度に発掘したMグリットの発掘において包含層が無いことを知ったので、K1・2とMグリットの間に設定し、包含層の東側限界をつかむ目的であったのである。

すなわち、A地区においては西側の包含層のある限界は、第一次の発掘において、T・P1としたグリットが限界であることが判明していたのである。

・A地区C～F区（第4図）→このC～F区は、東西20m、南北10mのグリットとして杭打ちと繩張りをしたのであるが、結果的にこのグリットの中央部に、南北2m、東西3m→(C)、2m×2m→(D)、2m×2m→(E)、3m×2m→(F)、として小グリットの発掘となった。この小グリットも本年新しく設定したグリットである。

このグリット設定の目的は、遺跡の西側の状況を知る目的であった。

・AN1-b区（第4図）は、台地の北東に位置する地点で、この地点に4m×8mのグリットを設定したが、そのうち2m×4m、(A2)、2m×4m(B1)のトレンチとして発掘した。

第4図に示したAN1-aとしたトレンチでは、縄文時代後期の好資料が出土している地点であることと黒土を取るブルドーザーが、近くまで来ている緊急性からこのグリットを設定して発掘する必要があった。

・AN2地区（第4図）→この地区は、館址のほぼ中央部に位置する。第六次発掘調査までに、東西20m、南北20mとしてグリットを設定し、東西5mごと、西より、O・P・Q・R、北より南へ10・11・12・13とし、番号をつけて、5m×5mのグリットとして発掘して来た。

第七次発掘では、さらに、西側へM・Nとして10mのばし、南側へ、M・N10～13、Q12、13・R12、13を設定した。

また、遺構の補強確認のため、第六次で発掘したO12、13・P12、13・Q11も再度発掘することにした。

このAN2地区は、館址の中央部にあるため、どのような遺構があるかを知る目的で設

定したグリットである。

以上述べたように、既述した目的をもって第七次発掘調査では、A地区K1, 2・L1, 2, C~F, AN2地区M10~13・N10~13・Q12・13・R12・13, S13・AN1-b地区A2, B1区としてトレンチ、グリットを設定し発掘調査した。

〔Ⅱ〕 地形・層序（第1～6図）

（1）地形

本遺跡は、五所川原市の東方約5km、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地上に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33,283m（基点）であって西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・境山・鶴野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく分けると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大駅迎丘陵（標高200～100m）、前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占めている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって3面に細区分ができる。すなわち、標高50～70mのⅠ面、30～40mのⅡ面、20～30mのⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30mを示しⅢ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木川および、その支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3km付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

（2）地質および層序（第5・6図）

本遺跡の基本層序は第5・6図（①・②・③）に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、Ⅶ層のローム層で、遺物の包含層はⅡ～Ⅳ層である。

Ⅴ～Ⅸ層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見さ

れた歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係から特に記載することにした。なお、この段丘の基盤をなすのはⅨ層の凝灰質細粒砂層である。以下に各層の特徴を述べる。

☆層序（第5・6図）

- I層・黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。
- II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。
- III層・黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。
- IV層・ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。
- V層・粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。
- VI層・黄褐色で粘性の強い粘土である。
- VII層・粘土・砂および直径数cm程度の主に亜角礫層で段丘礫である。
- VIII層・凝灰質細砂まじりの粘土で下層數cmはオレンジ色を呈する。
- IX層・遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で黄褐色凝灰質細粒砂層である。

以上が、当観音林遺跡における基本層序であるが、前々回の調査（第四次）では、C地区C2グリットの発掘調査において得た観察の結果、基本的に既述の層序と同様なるも、C地区における基本層序図（第5図）を掲げることにする。

☆C地区基本層序（第5図-①）

- I層・表土で草木根が多数混入する腐植土である。
 - II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径1mm程度の粗砂を混入しており、前記のⅡ層と同様である。
 - III層・原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、Ⅱ層と同質であるが、しまりがあり、粘質もややある。
 - IV層・黄黒色土で、V層の粘土質ロームも混入しており、III層からV層へうつる漸移層である。
 - V層・黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。
- 以深は、本台地の基盤をなす層で、第5図-③に同じである。当遺跡は、この層序のI～III層に遺物が包含されているが、特にⅡ・Ⅲ層が濃密である。また、検出された遺構は、いずれもV層を掘りこんでいるものであった。このV層以深は、本舌状台地の基盤をなす層（V～IX層）であって、既述したとおり壠状遺構との関係からV～IX層を基本層序として示した。

（川村真一による）

〔Ⅲ〕出土遺構（第7・8・9図、第15・16図）

（1）第一～第六次発掘調査で検出した遺構

この項では、第一次～第六次に至る発掘調査で検出した遺構について述べる。

- ・第一次→小土壙（土偶、ミニチュア土器を埋蔵していた。）－A地区
- ・第二次→焼土遺構、土壙群（7基、うち1基は晩期、6基は後期）、他に不明2基－B地区
- ・第三次→小土壙、1号住居址（西側半分）－B・C地区
- ・第四次→1号住居址、1号井戸、2号住居址－C地区
- ・第五次→溝状遺構、2号住居址（地床炉付）、土壙群（5基）－C地区、AN2地区
- ・第六次→土壙群23基（AN2地区）、柱穴群252、2号井戸－AN2地区

以上、第一～第六次発掘調査において検出した。これらの個々については、報告書にゆり、この項では検出した遺構についてだけ記しておく。

- ・以上、述べた各遺構は、縄文時代後期、同晩期、土師器使用の時代に分けられるが、住居址、井戸等は、土師器使用の年代、すなわち、平安時代後葉のものと考えられる。
- ・また、土壙については、晩期のもの、後期のもの、土師器使用時代のものに分けられる。
- ・柱穴についても同様であるが、Ⅱ層で確認できたもの、Ⅳ層上面で確認したものがあり、時差がある。（カマド）についても同様であるが、破壊された住居址も認められるので、三時期に分けられる可能性も残る。
- ・堀については、形態そのものは、ほぼ「箱型」と断定できるが、年代を知る決め手は目下ない状況である。わずかに「カマド」を備えた住居址を切って堀り下げていることから、土師器を伴う住居址より新しいと言う事実だけである。

以上が、第六次発掘調査までの所見であるが、つぎに第七次発掘調査で検出した遺構について述べる。

（2）第七次発掘調査で検出した遺構（第7・8・9・15・16図）

- ④住居址（4号・5号・6号・7号・8号）、住居址は、（4・5・6・7・8号）の8棟を検出した。（1～3号は、C地区で第三～六次で検出）
- ・4号住居址は縄文時代のもので、円形～橢円形プランのものである。出土地点、層位は、

N 11 V層上である。年代を知る手がかりはなかった。

・ 5号住居址は、方形プランのもので、カマドを備え、出入口は、南東隅にあるもので、カマドの北東、南西には、わずかに溝状遺構が認められた。出土地点・層位は、AN 2 地区-M 11, 12, N 11, 12にわたるもので、V層を掘り込んでおり、4号住居址を切っている。1辺4m75cmの正方形である。なお、この5号住居址のカマド右袖には、(P・P・L 111-608)に示した杯形土師器が密着して出土したので年代を知る好資料と考える。このものは、器形から「桜井第二型式」の土師器坏で、平安時代後期のものと考えられる。

・ 6号住居址→このものは、R 12 V層上面で検出したもので、住居址の壁面は、北東部、北西部は検出されなかった。この住居址は、出入口に近く、2号地床炉をもつものである。

なお、東側・北側は、R 12グリットの限界で発掘しなかったので不明である。

この6号住居址は、方形プランのもので、土師器使用の時期、すなわち平安時代後葉のものであろう。

・ 7号住居址→7号住居址は、M 10, N 10の両グリットにわたるもので、V層上面で検出したものである。

この7号住居址は、壁面が注意しなければ見落す程浅いもので、柱穴の配列を追求して把握できたもので、地床炉または、炉址は無かった。このものは、長径3.7m、短径3.2mの不整円形プランであるが、住居址内に柱穴が多くあるため、かなり破壊されているものである。

なお、この7号住居址は、第7図に示すとおり、21号土壙によって切られている。

のことから、7号住居址は古く、21号土壙は新しいのであるが、年代決定は、きめ手がなく、多分绳文時代後期～晩期の住居址と考えられる。

・ 8号住居址→8号住居址としたものは、M 13グリットの西南壁に切られている状態で検出したもので、V層を約25cm程掘り込んでいるものである。未だ完掘していないので、時期等は不明である。

④土壙（第7図）

土壙は、全部で23基検出した。それを出土グリットごとに示すと下記のようになる。

☆検出した土壙（第7図）

- R 13・12→4・5・7号土壙=3基
 - Q 12・11→1・2・3・8号土壙=4基
 - N 12・11・10→ $\left\{ \begin{array}{l} 10 \cdot 16 \cdot 17 \cdot 18 \\ 19 \cdot 20 \cdot 25 \end{array} \right\}$ 号土壙=7基
 - M 12・11・10→ $\left\{ \begin{array}{l} 9 \cdot 12 \cdot 13 \cdot 14 \\ 15 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 23 \\ 24 \end{array} \right\}$ 号土壙=9基
- 計 23 基 (6・11欠)

以上23基である。他に柱穴状の小土壙が認められるが省略する。

検出した確認面は、第V層（第5図）としたベースの上面である。

本遺跡は、V層上面に縄文後期、晚期、および土師器使用時代の遺構があり、柱穴等も同レベルで検出されるため、年代的把握が困難である。

以下、土壙についての発掘所見を述べる。

◎ 1・2・3・4・5・7号土壙について

これらの土壙は、Q 12、R 13・12のV層上面で確認したものである。

このうち、3・4・5・7号は、ベルトまたは壁面に接するものもあり未完掘である。

なお、I号土壙は、半分は破壊されているものである。

これらの土壙からは、縄文時代後期・晚期の土器、土師器等の出土があり年代は不明である。但し、未完掘ではあるが、3・4・7号土壙のうち、7号は新しく、4号は、V層下に黒土層があって、土師器を埋納した土壙である。このグリットのV層としたローム層は貼り床の可能性がある。なお8号土壙（Q 11 V層）は、貯蔵穴かも知れない。

◎ 9・16号土壙について、この両土壙は、5号住居址に近接しており、特に9号土壙は、この住居址に属するものようである。但し16号土壙は、壁面に接しているため形態は不明である。これらの土壙は、II層とした黒土が覆土となっており、その覆土中から、土師器・縄文土器（後・晚期）片の出土がある。

なお、9号土壙の底面に密着して土師器杯形破片の出土がある。

◎ 10・12・13・14・15号土壙について

• 10号土壙（N 11、M 11）は、これも5号住居址に切られているものである。したがって、住居址より古いものと考えられる。この土壙の底面に密着して、第4群土器とした縄文後期「十腰内I・II式」の中間型式の土器片が4片出土した。この10号土壙は縄文後期のも

のようである。

・12号土壙（M11Ⅴ）は、M11グリットの北壁に接しているもので、7号住居址、21号土壙と切り合いになるものらしい。ベルトのためその切り合いの状況は不明である。この土壙内の覆土からは、土師器片・縄文晚期大洞C 2式土器が出土したが、年代決定のきめ手とすることはできない。時期不明としておく。

・13・14・15号土壙（M11Ⅴ）、この3つの土壙は、相互に接しているもので、発掘所見では、切り合い関係は無いように観察される。

このうち、13号土壙は、M11の西壁に接しており、その形態は不明である。

この3つの土壙は、土壙内に柱穴状ピットをもつ点が、1号土壙と共に通するところである。この柱穴状ピットが、13・14・15号土壙それぞれに付属するものか、別個のものかは発掘所見では、付属するものと提えた。

その根拠は、どのピットも土壙を破壊していないからである。

出土した遺物は、須恵器甕形破片、土師器片であるが土壙を埋める黒土（Ⅱ層）中からである。このⅡ層とした黒土は、うごいているので、土壙の時期を判定する資料にはならない。

・17・18・19号土壙（N10Ⅴ）、この17～19号とした土壙は、それぞれ、N11の東壁、北壁に接しているもので、そのプランは不明である。

このうち、18号土壙は、その南側に、5号カマド址に接しており、土壙の南側、すなわちカマドに接する部位は、焼土であった。一応土壙としたが、カマドを備えた住居址の可能性もある。出土した遺物は、土師器（壺・甕形破片）で、18号土壙は、土師器（第二型式）の年代を与えることができる。

・17・19号は、両土壙とも、壙内にピットをもつもので、土壙内からは出土遺物はない。

・20・23・24・25・26号土壙（N10・M10Ⅴ）のうち、20号は、小土壙、25号土壙は、プランが変形したものであろう。

両者とも、15～18cmと浅いものである。また、両者とも遺物の埋納ではなく、その周辺から土師器片（甕形）が出土した。

23・24・26号土壙のうち、24号土壙は、26号土壙によって一部切られている。したがって、26号土壙は新しく、24号土壙は古い。

この26号土壙は、深さが75cmと深く柱穴とは考え難い。23・24号とも柱穴状ピットをも

つ点は、他の土壌とも共通する。

これらの20・23~26号土壌の覆土内から、須恵器片・土師器片・縄文土器片（後期・晚期）の出土はあったが、土壌の年代を決定する資料にはならない。

・22・21号土壌（M10・N10Ⅴ）この両土壌は、7号住居址を切っており、21号土壌は、12号土壌とも切り合うことは既に述べた。

したがって、7号住居址は古く、21・22号は新しいものである。残念ながら、両者とも年代を決定する遺物は無い。22号土壌内のⅡ層とした黒土、21号土壌内のⅠ層には、後期「十腰内Ⅰ式」晚期「大洞C2式」および土師器片（甕形）破片が出土したが年代決定の資料とはならない。

以上、1号~26号の23基の土壌について述べたが、時期を決定する遺物が少ないので残念である。

◎2号井戸（第7・16図）

この2号井戸は、P13・12、Q13にわたって出土したものである。確認面は、V層上面であった。（1号井戸は、C地区X1グリットV層上面で、第四次~第五次調査で完掘した。）

この2号井戸は、不整な四角形を二段に造り、その後垂直に掘り下げたものである。

（第7図）は、井戸の周囲にあった盛土を除去した後の実測図である。

外側の1辺が約2.25m~1.50m、二段目の不整四角形は、長辺約1.5m、短辺1.1mで、円形の垂直面上端は、径1.2m~1.5mのものである。また、深さは、（第16図）に示すとおり、危険防止のため1.2mで掘り下げを中止し、ボーリング棒で底面の深さを調べたのであるが、約50cm下で砾群があることがわかったが、それ以深は、約30cm程度で井戸底に達するものようである。

すなわち、確認面であるV層上面から井戸底まで、約2mの深さのものである。

井戸内の覆土中からは、後述する（表4）に示す獸骨・焼けた小骨片、土師器（甕形片）、須恵器片（甕形）、縄文土器（大洞C2式）等の出土があったが、井戸底の遺物は不明である。

以上、2号井戸の使用期を決定する手がかりは無いが、館址であること、空堀がめぐっている点を考慮すると、館址との関連で考えることが可能であろう。

④地床炉（第7・15図）

地床炉は、1～5号の5基を検出した。この5基の出土グリット、出土層を示すと、つぎのとおりである。

1号地床炉 — R13V

2号地床炉 — R12V（6号住居址に伴う）

3号地床炉 — M13V

4号地床炉 — N13V

5号地床炉 — N10V

以上、すべて第V層上面で検出したものであるが、2号地床炉を除き、他は、何に付属する施設かは不明である。

しかし、3号地床炉は、8号住居址、5号地床炉は、7号住居址の屋外炉の可能性も否定できない。特に7号住居址は、炉址が見当らないものである。また、8号住居址としたものは、未完掘なので、3号地床炉との関係については、不明である。

⑤カマド址（第7図・第9図）

1号カマド址 — Q11V

2号カマド址 — N12V（第5号住居址）

3号カマド址 — N10V（18号土壙）

4号カマド址 — （第9図→A N 1 b—A 2 II）

カマド址は、以上の4基を検出した。

このうち、1号としたものは、カマド址のみ残っていたもので、南方を向くものである。

このカマド址は焚口部が北側にあって、焼土が焚口部周辺に広がっていたが、住居址の壁面、床面とも無く起伏があつて破壊されていた。

• 2号カマド址は、5号住居址のカマド址でやはり南向きである。

既述したように、この2号カマド址の右側に、底面に「糸切り痕」のある坏形土師器が密着しており、5号住居址の時期判定に役立つものである。

• 3号カマド址は、第7図に示す18号土壙に付属するもので、既に述べたとおり、18号土壙としたものは、住居址の可能性がある。

この3号カマド址も形状は崩れているが、南向きのものである。

• 4号カマド址は、（第9図）に示すとおり見取り図であるが未だ完掘せず、カマド址と

見られる。このものも南向きと考えられる。

①溝状遺構（第7図）

この溝状遺構は、全部で7本検出したものである。それを例記すると、つぎのとおりである。

1号溝状遺構 — M13V

2号〃 タ — M12・13V

3号〃 タ — M11V

4号〃 タ — Q12・13V

5号〃 タ — Q11V

6号〃 タ — P13・12V

7号〃 タ — N13V

以上の7本であるが、このうち、5号としたものは、曲っているもので、また、3号としたものも曲線をなすものである。

これらのものは、幅20~30cm、深さ10~30cmの浅いものであるが、6号溝状遺構は、幅約30cm、深さ30~40cmと深く、2号井戸に、4号溝状遺構とともに接続している。

また、5号としたものは、その西端に柱穴状ピットがある。

- 1号としたものは、浅く3号地床戸と、焼土堆に接する。
 - 2号溝状遺構は、5号住居址の付属施設の可能性がある。
 - 3号としたものは、12号土壤につながるもので、7号としたものは、深淺があつて短い。
- 以上、1~7号溝状遺構は、その性格・機能等は、残念ながら不明であるが、すべてV層を掘り込んでいるもので時期的には同一時期のものと考えられる。

②柱穴群（第7図）

柱穴状ピットは、約280こ検出した。これらの柱穴群を、遺構に付属するもの、縄文期（後期・晚期のもの）、土師器・須恵器時代のもの等々、識別する力が不足であることが残念である。今後さらに学習をつづけ、力をつけていきたいと願うところである。

これらの柱穴群、その他の遺構を含めて、すべてV層上面で検出される。

すなわち、縄文時代後期、同晚期、土師器使用期の各期の遺構が、V層上面に所在したことだけは明らかである。

そして最も顕著なものは、土師器時代の遺構であると言うことは、遺跡全体から考えて間違いないところと考えている。

[IV] 出土遺物 (表1~5, C・P・L1~2, P・P・L1~121, S・P・L1~11, B・P・L14)

第七次発掘調査（第1期発掘調査）で出土したものは、下記のとおりである。

①土製品 ②土器 ③石器・石製品 ④骨類・鉄製品・植物遺存体 古錢

これらの出土遺物について以下に述べることにする。

(1) 土製品 (C・P・L1~2)

出土した土製品としたものはつぎのとおりである。

①土偶（顔面1、胴～足2、板状4、肩～胸部2）→計9件

②舟形土製品1

③葦形土製品4（蓋形）

④把手（三角形1、橋形1）→計2

⑤腕輪状土製品1

⑥三角形土製品（施文があるもの2、無文1）→計3

⑦円盤形ペンダント状土製品1

⑧糸巻き形土製品1

⑨異形土製品1

⑩土器把手2、脚部1、口縁施文土器片1

以上の①～⑩の土製品が出土したが、このうち⑩としたものは、土器の項に入れるのが良いのであろうが、この項に入れた。

なお、これらの土製品等については、C・P・L1～2に出土区、層、時期等は記載してあるので省略したい。

また、⑪円盤状土製品（土器片を活用したもの）が17件出土した。（P・P・L110）

觀音林遺跡出土、土器編年表

1989・3

(縦文時代土器編年表を含む)

(表1)

推定年代	区分	土器編年	觀音林第一次	觀音林第二次	觀音林第三次	觀音林第四次	觀音林第五次	觀音林第六次	觀音林第七次	
			年度	S49(試掘)	S58(予備)	S59(予備)	S60(本調査)	S61(本調査)	S62(本調査)	S63(本調査)
12000	草創期	早期	型式	/	/	/	/	/	/	/
6000	前期	円筒a式 筒b式 下層c式 d1式 d2式				円筒下層式 a式	円筒下層式 a式	円筒下層式 (+)	第一群	円筒下層式 a(+)
						b式	d1式	d2式		
5000	中期	円筒a式 筒b式 上層c式 d1式 d2式 e式				円筒上層式 b式	円筒上層式 b式	(+)	円筒上層式 (+)	第二群
										円筒上層式 (+)
4000	後期	十腹I式 II式 III式 IV式 V式	十腹内I式	十腹内I式	十腹内I式	十腹内I式	十腹内I式	十腹内I式	第三群	十腹内I式 (+)
			b式	b式	b式	b式	b式	b式	第四群	I(+)
3000	晩期	大洞式 B+C式 (C1)式 C2式 (C2-A)式 開口A式 C'式	大洞式	大洞式	大洞式	大洞式	大洞式	大洞式	第六群	大洞式 C1式 C2式 (C2-A)式
			C1式	B+C式	B+C式	B+C式	C1式	C1式	第七群	C1式
2000	新生	A式 B+C式 (C1)式 C2式 (C2-A)式 開口A式 C'式	A	A	A	A	C2式	C2式	第八群	C2式
							(C2-A)式	(C2-A)式	第九群	(C2-A)式
B+C式 A-D式	土師器 須恵器 使用の 時代	土師器 第一型式	/	/	/	/	/	/	/	/
800	土師器 須恵器	土師器 第二型式 須恵器	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	第十群	土師器 第十一群
			(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)		
備考	1) (+) → 型式名不明なるも出土あり 2) (C2-A)式は仮称であるが(窯山式)併行土器 3) 十腹内I式～V式の中間型式および同V式の最終末、未命名型式を(+)で示した。									

(2) 土 器 (表1・3, P・P・L 1~121)

観音林遺跡の第七次発掘調査においては、既述したとおり、A地区→K 1・K 2・L 1・L 2, C・D・E・F、AN 2地区→M 10~13, N 10~13, Q 11, O 12・13, P 12・13, R 12・13, S 13(拡張区)、およびAN 1 b-A 2, B 1の各グリット、トレンチを発掘した。

これらの発掘区から出土した土器群は、(60cm×28cm×15cm)のコンテナで約60箱の出土である。

このうち、約45%は、縄文時代後期、約50%は、縄文時代晚期、約5%は、土師器で、須恵器、および縄文前・中期土器は少量である。

これらの土器群を群別に分け型式ごとに分類すると下記のようになる。

☆出土土器の群別(型式別) - (表1, 表3)

[第一群土器 円筒下層式土器	……前期]
第二群土器 円筒上層式土器	……中期		
[第三群土器 十腰内I式土器	……後期]
第四群土器 ☆ 中間型式	……々々		
[第五群土器 十腰内II式土器	……後期]
☆ (II式後葉を含む)			
[第六群土器 大洞C 1式土器	……晩期]
第七群土器 大洞C 2式土器	……々々		
第八群土器 大洞C 2-A式土器	……々々		
(仮称)			
第九群土器 大洞A式土器	……々々		
[第十群土器 土師器]
第十一群土器 須恵器			

以上の11群に分類される。このうち、完形・復原土器は、(表3)に示すとおり、後期・晩期を含めて104個体を掲示した。また、土師器については、7個体(坏形3、變形4)を(P・P・L 111~120)に示してある。

觀音林遺跡（第七次）出土、完形・復原土器→器形別・型式別分類表

1984.03.20 (表3)

区	型	鉢 形 土 器	浅 鉢 形 土 器	壺 形 土 器	台付 鉢 形 土 器	台付 壺 形 土 器	皿 形 土 器	甕 形 土 器	深 鉢 形 土 器	大 形 深 鉢 形 土 器	小 形 深 鉢 形 土 器	小 形 浅 鉢 形 土 器	袖珍 土器 (台付 浅 鉢)	袖珍 土器 (壺 形)	片口 鉢 形 土 器	土師 器 (甕 形)	計		
後 期	十腰内 I 式										3	3	2			3	4	16	
	(+)	4	1								1							6	
期	十腰内 II 式																		
	(+)		1															1	
	計	4	3							4	3	2				3	4	23	
晚 期	大洞 C1式	6			2	1				1	1							11	
	大洞 C2式	8		12	3		1	4		5	3		1		2			39	
	大洞 C2~A式 (聖山式)			1														1	
期	大洞 A式	6		2	4	5	6		5					1	1			30	
	計	20		15	9	6	1	10	11	1	3		1	1	1	2		81	
	總計	24		18	8	6	1	10	11	1	7	3	2	1	1	2	3	4	104

④前期・中期の土器（P・P・L 1）

P・P・L 1に掲げた縄文時代前期・中期の土器は、すべて小破片で、これらの破片を、胎土に混入された纖維の有無、砂粒の状況、および、器表面の文様等から、前期（下層）、中期（上層）の土器として分類した。本遺跡においては、（表1）に示すとおり第一次～第七次発掘調査において、破片のみの出土は常にあるが、遺構または復原可能な土器は出土しない。したがって、この時期には、生活基盤である居住地ではないように思われる。

⑤後期の土器（P・P・L 2～16, P・P・L 17～34, P・P・L 35）

後期の土器は、既に述べたとおり、第3・4・5群土器に分けられる。

⑥第3群土器

第3群土器としたものは、「十腰内遺跡」を標式遺跡とする「十腰内Ⅰ式」土器群である。この群のものは、本遺跡のみでなく、当津軽半島西部では、最もノーマルなものである。

⑦移行期の土器（第4群土器）

第4群土器としたものは、第3群土器の仲間とは考え難いもので、つぎの第5群土器とも明らかに区別できるもので、その器形、文様・胎土とも異なっているように観察されるものである。

この第4群土器は、一応「十腰内Ⅰ式」と、「十腰内Ⅱ式」の間を埋めるものとして、「十腰内Ⅱ式」土器に移行する中間型式のものとして捉えたいと思う。

この第4群土器としたものは、鉢形、壺形、甕形に器形別に分けられる。

・鉢形土器は、その器形に特徴があって、口径が大きく、底部から口縁に向って、大きく開く器形である。

・壺形土器は、口頸部が無文で、胴部が球形をなす器形である。

・さらに甕形土器は、口頸部が外反し、肩部が弧状にまるく張る特徴を持っている。これらの器形的特徴については、実測図を参照されたい。

・施文は、第3群土器の文様要素を認めるものも一部にあるが、口頸部には、「重山型文」「重波状文」および「垂下するS字状文～電光型文」等々が施文され、文様的にも第3・5群土器と区別が可能である。

・胎土は、観察した限りにおいて、第3・5群土器とは異なるように見られるが、分析してみると断定はできない。

胎土は精選されており、土器の器厚が厚く重量感がある。

なお、この第4群とした土器群は、その特徴の一つに「口唇部に縄文の施文があるもの、および、無いもの」の2類に分けることが可能であるが類別は、資料の増加を待ちたいと考えている。

●第5群土器（P・P・L35）

この第5群土器としたものは、「十腰内Ⅱ式」土器である。

本遺跡では、（表1）に示すとおり、第一次調査以来毎年出土がある、しかし、未だ1個体も復原できるものは出土していない。

第七次においても（P・P・L35）に示したのが出土数の全部である。

したがって、〔Ⅲ〕に述べた出土遺構とは、関連がないと考えられる。第一次～第七次にわたって少量ではあるが出土が続くことから、本遺跡の所在する舌状台地は、「十腰内Ⅰ式」土器を造った縄文人が野にやって来た生活舞台であったかも知れない。

☆第5群（十腰内Ⅱ式）土器としたものの中には、Ⅱ式の後葉～Ⅲ式に将来分類可能なものも認められるが、資料の増加を待って再検討を加えたいと考え、一応第5群土器の仲間として分類しておくことにした。（念のため）

◎晚期の土器

●第6群土器（P・P・L36～51）

第6群土器は、縄文時代晚期、「大洞C1式」土器である。

出土した大洞C1式土器は、口頸部に施文帯を有し、胴部には縄文を施文する「粗製」土器が多く、「精製」土器は少ない。

器形では、鉢形土器が多く、皿形土器がつぎに多いのであるが、前者は粗製土器で、口頸部に「刻目文」が施文される。後者の皿形土器は、精製土器が多いようである。

この第6群土器とした大洞C1式土器は、器形別に分類すると、鉢形・台付鉢形・台付浅鉢形・深鉢形・広口壺形・皿形等に分けられるが、各器形ごとの出土数が少なく、本遺跡の主たる土器群とは考え難いところである。

なお、第七次発掘調査では、大洞B・C式土器は、小破片を含めて1片も出土しない。

第2～6次発掘調査においては、（表1）に示すとおり出土があった。

のことから、大洞B・C～大洞C1式土器を使用した期間は、本遺跡では短期間であったようにも推察される。

●第7群土器（P・P・L 52～79）

第7群土器としたものは、縄文時代晩期「大洞C2式」土器である。

この大洞C2式土器は、出土量が最も多いもので、本遺跡の中心的な遺物である。

（表3）に示したとおり、完形・復原土器を含めて、39個体と同じ土器型式で最も多い点を見ても、理解されるところである。

出土した土器の器形別分類を見ると、鉢形・壺形・台付鉢形・台付壺形・皿形・深鉢形・大形深鉢形・袖珍土器・片口付鉢形土器と器形別に見ても、本遺跡の主体をなす土器であることが理解される。

なお、特に注目したいのは、(1)土製品の項で示した「舟型」土製品・および、P・P・L 62～442に示した「台付壺形土器」である。本遺跡では、第1～6次発掘調査においては、破片でも出土していない。また、他の遺跡においても、殆んど例を見ないものようである。今後類例を待つてさらに考えたい。

●第8群土器（P・P・L 59～438, P・P・L 80, - 467）

第8群土器としたものは、第七次発掘調査では、わずか2個体分識別できたものである。

この2個体は、大形壺と、小形壺であるが、前者は破片で肩部～胴部のものである。後者は、ほぼ完形品である。

いずれも精製土器で、器形的には、大洞C2式壺形土器と同様であるが、施文帶の文様に、大洞C2式の主文様である曲線文と、大洞A式土器の主文様である「入組み工字文」の未完成な文様が施文されるものである。

筆者は、この種の施文がある土器群を一括して「大洞C2-A式」の仮称を用いてきたのであるが、この一群を「聖山式」とする研究者もある。

但し筆者が仮称としたのは、層位的な把握が不可能であったからである。その理由は、第6図に示すとおり、混合層内の出土であったためである。

●第9群土器（P・P・L 80～110）

第9群土器として分類したものは、「大洞A式」土器である。

この第9群土器は、第七次発掘調査では、第7群土器（大洞C2式）のつぎに出土量が多い土器群である。

この「大洞A式」土器は、（表3）に示したように、完形・復原土器の出土数を見てもわかるとおり、30個体が出土した。また出土した破片数を見ても、第7群土器のつぎに多

い出土数であった。

この大洞A式土器を器形別に分類すると、つぎのようになる。

鉢形・壺形・台付鉢形・台付浅鉢形・皿形・深鉢形・袖珍土器（台付浅鉢・皿形）

すなわち、第9群とした大洞A式土器においても、土器組成にバラエティがある。

のことから、本遺跡は、大洞C2式～大洞A式土器を使用した期間に中心があつたものと考えられる。

この第9群土器の施文を見ると、「入組み工字文」と「矢羽根状文」が多用されていることが理解される。

器形別に見ると、「入組み工字文」は、鉢形・壺形に多く、「矢羽根状文」は、皿形土器に顕著であるように認められる。

また、鉢形土器等には、横方向に突出する粘土粒も多用されている。これらの施文や突起については、地域差があるのであろうが、本遺跡では、既述したように顕著に認めることができる。

なお、本遺跡においては、縄文時代晩期の「大洞B式」と「A'式」の土器は、第1～7次発掘調査において、破片を含めて1片も出土しない。この両型式の土器を出土する遺跡は、津軽半島西部では、希少であることにも原因があるやも知れない。

④土師器

①第10群土器（P・P・L 111～120）

第10群土器は、土師器を一括したものである。

土師器は、〔Ⅲ〕で述べた遺構に関係が深いと考えられるが、出土量は、土器の総出土量の約5%程度である。

出土した土師器は、壺形・甕形に分けられるが、両器形とも、底面に細砂が付着しているものが多い。

これらの土師器は、つぎに述べる須恵器を伴なうこと、および検出した遺構（カマド、住居址）等から、「東北北部の土師器型式」第二型式に比定されるものであろう。

なお、出土した土師器のうち壺形土師器の底面には、回転ロクロによる「糸切り痕」のあるものもあり、その器形から、第二型式のうちでも新しいもののように考えられる。

なお出土した壺形土師器の胎土、焼成、および色調を観察すると、軟質で明橙色のもの、硬質で灰白色を呈するものの2種があり、器形においても、相違が認められる。すなわち

前者は「赤焼き系」土器とも考えられるが、「赤焼き系」土器の既念が目下不明確なため断定は控えたい。

④須恵器

●第11群土器（P・P・L 121）

第11群土器としたものは、須恵器である。

出土した須恵器は、壺形・長頸（細口）壺の破片で、壺形には、「タタキ目」が認められ、長頸（細口）壺の破片には、窯印のあるものも認められる。

これらの須恵器は、胎土分析をしなければ断定はできないのであるが、器形等から、すぐ近くに所在する「前田野目、持子沢窯址群」のものと考えられる。

これらの、第10群（土師器）、第11群（須恵器）は、概ね11世紀頃のものと考えられるところである。

以上、第1～第11群土器について述べた。つぎに、石器・石製品について述べる。

觀音林遺跡出土・石器・石製品等一覽表（表2）

種別	類別	S+P+L No.	整 理 No	計 準 値 (cm)	重 量 (g)	石 質	出 土 区・層 位
			通し No	器種 No			
石 鋸	1	1	1	(先端欠) 2.92×1.17×0.41	2	珪質頁岩	AN ₁ b Q ₁₃ V
		2	2	2.28×1.32×0.12	4	"	AN ₁ b B ₁ II
		3	3	1.81×1.26×1.32	1	めのう	A K ₁ II
		4	4	1.96×0.89×0.46	2	"	A K ₁ II
		5	5	2.18×1.32×0.49	4	珪質頁岩	A K ₂ III上
		6	6	2.96×0.96×0.28	2	"	AN ₂ R ₁₂ II下
		7	7	(先端欠) 2.83×1.06×0.37	2	"	A K ₂ III下
		8	8	4.02×1.36×0.67	4	"	A K ₂ III上
		9	9	3.36×1.38×0.67	9	"	AN ₂ Q ₁₂ I下
		10	10	3.36×1.38×0.46	2	"	AN ₂ M ₁₃ IV上
		11	11	1.47×1.29×1.36	10	"	A K ₂ III
		12	12	2.22×1.41×0.36	10	"	A K ₂ III
		13	13	2.39×1.45×0.37	8	"	AN ₁ b B ₁ III
		14	14	3.11×0.89×0.50	10	"	AN ₁ b B ₁ II
		15	15	Pieck 3.76×1.21×0.49	7	"	AN ₂ N ₁₃ II
		16	16	Pieck 4.66×1.46×0.46	8	"	A K ₂ III
		17	17	2.46×1.68×0.39	1	"	A K ₁ II
		18	18	2.14×1.34×0.46	2	めのう	A K ₁ II
		19	19	(先端欠) 1.60×1.60×3.02	1	珪質頁岩	A K ₁ II
		20	20	5.86×1.32×0.58	8	"	A K ₁ II
		21	21	2.29×1.47×0.55	5	めのう	A K ₂ III下
		22	22	2.61×1.15×0.47	8	珪質頁岩	A K ₂ III下
		23	23	2.86×1.07×0.5	5	"	A K ₂ III下
		24	24	3.66×1.55×0.51	4	"	AN ₁ b B ₁ III上
		25	25	3.42×1.79×0.62	2	"	AN ₁ b B ₁ II
		26	26	3.22×1.22×0.52	3	石英片岩	AN ₁ b B ₁ III
		27	27	Pieck 3.08×1.82×0.58	7	めのう	AN ₁ b B ₂ II
		28	28	3.39×0.76×0.38	4	珪質頁岩	A K ₂ II
		29	29	(未定) 3.48×2.18×1.82	10	"	AN ₁ b B ₁ II

石 錄	1	30	30	$4.63 \times 1.73 \times 0.62$	8	珪質頁岩	AN ₂	Q ₁₁	I
		31	31	Flake $3.04 \times 0.98 \times 0.49$	5	"	AN _{1b}	B ₁	II
		32	32	$3.86 \times 1.50 \times 0.7$	8	"	A	K ₂	III
		33	33	(未完) $2.96 \times 1.51 \times 0.67$	7	"	AN ₂	M ₂	II
		34	34	$3.54 \times 1.23 \times 0.45$	2	"	A	K ₂	III _L
		35	35	$4.04 \times 1.38 \times 0.73$	8	"	A	K ₂	III _L
		36	36	先端欠 $2.56 \times 1.61 \times 0.44$	3	"	A	L ₁	I
		37	37	$3.90 \times 2.29 \times 0.62$	10	碧玉	A	K ₂	II
		38	38	(複数) $2.96 \times 1.98 \times 0.73$	9	珪質頁岩	A	K ₁	II
		39	39	(未完) $3.15 \times 1.76 \times 0.98$	10	めのう	AN ₂	R ₁₃	II
削 器	有 縦 柄 形	40	1	Flake $7.62 \times 2.47 \times 0.76$	15	珪質頁岩	AN _{1b}	B ₁	III
		41	2	$6.82 \times 7.27 \times 1.55$	60	"	A	K ₂	III _上
	有 横 柄 形	42	3	$6.55 \times 4.56 \times 1.48$	50	"	A	C~E	N _T
		43	4	$5.98 \times 6.11 \times 1.18$	30	"	AN ₂	Q ₁₂	I _T
		44	5	(半次) $4.10 \times 4.50 \times 1.42$	25	"	AN ₂	Q ₁₂	I _T
		45	6	$1.85 \times 3.67 \times 0.47$	3	"	A	K ₂	III
	無 縦 柄 形	46	7	Flake (未完) $3.92 \times 2.08 \times 0.67$	10	黒曜石	AN ₂	P ₁₂	II
		47	8	Flake $6.62 \times 2.35 \times 0.9$	13	珪質頁岩	AN ₂	Q ₁₁	II
	有 橫 柄 形	48	9	$3.88 \times 6.52 \times 0.88$	20	"	AN ₂	Q ₁₁	II
		49	10	$6.19 \times 4.32 \times 3.8$	35	"	A	L ₂	II _F
		50	11	$5.75 \times 3.02 \times 0.62$	18	"	AN _{1b}	A ₂	III
		51	12	$10.37 \times 4.15 \times 1.46$	70	"	A	K ₂	III
		52	13	$6.55 \times 3.81 \times 1.0$	21	"	AN _{1b}	B ₁	II
	無 縦 柄 不 定 形	53	14	(半次) $5.92 \times 3.55 \times 1.16$	25	"	AN _{1b}	B ₁	II
		54	15	(Flake) $5.45 \times 5.52 \times 0.91$	30	"	AN _{1b}	B ₁	II
		55	16	(Flake) $5.70 \times 1.92 \times 2.07$	30	"	AN _{1b}	A ₂	II
		56	17	$5.72 \times 4.20 \times 1.42$	40	"	AN ₂	P ₁₂	I
	有 橫 柄 不 定 形	57	18	$6.28 \times 4.18 \times 1.15$	40	"	AN _{1b}	A ₁	II
		58	19	Flake $8.02 \times 6.12 \times 1.36$	88	"	AN ₂	P ₂	I
		59	20	$5.56 \times 6.10 \times 1.82$	74	"	AN _{1b}	B ₁	II
		60	21	$7.32 \times 5.80 \times 1.18$	50	"	A	K ₂	II
	有 橫 柄 形	61	22	$3.68 \times 4.89 \times 0.62$	10	碧玉	AN _{1b}	B ₁	II
		62	23	$4.62 \times 2.34 \times 0.89$	10	珪質頁岩	AN _{1b}	B ₁	II

削器	2	不定形 無柄形	63	24	$4.10 \times 4.08 \times 0.31$	10	めのう	AN ₁ b	B ₁	II
			64	25	$6.59 \times 2.62 \times 1.08$	20	珪質頁岩	A	L ₁	II
			65	26	$3.08 \times 1.93 \times 0.80$ (半分)	8	流紋岩	A	L ₁	II
			66	27	$3.12 \times 3.67 \times 0.68$ (Flake)	10	珪質頁岩	A	L ₁	II
			67	28	$3.13 \times 3.83 \times 0.56$ (Flake)	9	"	AN ₁ b	B ₁	III
			68	29	$5.99 \times 3.84 \times 0.99$ (Flake)	30	"	A	L ₁	II
			69	30	$5.46 \times 3.79 \times 1.31$ (Flake)	32	碧玉	AN ₂	N ₁₁	II
			70	31	$7.28 \times 6.45 \times 1.49$ (Flake)	88	珪質頁岩	AN ₂	M ₁₀	II _F
			71	32	$9.33 \times 6.37 \times 1.08$ (Flake)	88	"	AN ₂	L ₂	II
			72	33	$7.49 \times 5.45 \times 1.29$ (Flake)	56	"	AN ₂	N ₁₂	II _F
			73	34	$4.67 \times 6.27 \times 1.34$	30	"	A	C~F(E)	I
			74	35	$7.03 \times 2.51 \times 0.99$ (Flake)	14	"	A	M ₁₀	II
			75	36	$6.02 \times 1.67 \times 1.68$	47	"	A	L ₁	I
			76	37	$4.49 \times 2.42 \times 0.68$ (Flake)	10	"	AN ₂	R ₁₃	II
			77	38	$1.42 \times 3.27 \times 0.69$	10	"	A	K ₁	II _F
			78	39	$3.44 \times 2.67 \times 0.32$	10	めのう	A	K ₁	II
			79	40	$5.39 \times 3.20 \times 1.02$	20	珪質頁岩	A	L ₁	II
			80	41	$6.26 \times 3.48 \times 0.99$	18	"	A	K ₂	III
			81	42	$5.33 \times 2.93 \times 1.21$	20	"	A	K ₁	II
		横形	82	43	$6.26 \times 5.33 \times 1.00$	37	"	A	K ₂	II
搔器	3	定形 整形	83	1	$7.47 \times 2.06 \times 1.0$ (半分)	20	"	AN ₂	N ₁₀	II _F
			84	2	$4.60 \times 3.82 \times 1.08$ (半分)	22	"	AN ₁ b	B ₁	II _F
			85	3	$4.60 \times 3.82 \times 1.08$ (半分)	20	"	A	K ₂	II _F
			86	4	$5.67 \times 4.06 \times 2.21$ (半分)	45	"	AN ₁	A ₂	II
			87	5	$5.32 \times 4.35 \times 2.15$ (半分)	10	"	AN ₂	Q ₁₁	II
			88	6	$4.43 \times 5.28 \times 1.58$ (半分)	60	"	AN ₂	Q ₁₁	II _F
			89	7	$4.43 \times 5.28 \times 1.58$ (半分)	40	"	A	L ₁	II
			90	8	$6.31 \times 3.50 \times 1.29$	30	"	AN ₂	N ₁₁	II
			91	9	$4.32 \times 2.93 \times 0.88$	12	"	AN ₂	R ₁₃	II _F
			92	10	$5.80 \times 2.46 \times 0.98$	13	"	A	L ₁	II
			93	11	$4.68 \times 2.50 \times 0.95$	10	"	A	L ₂	II
			94	12	$2.58 \times 2.0 \times 0.72$	8	めのう	A	L ₂	II
			95	13	$3.83 \times 2.32 \times 0.95$	12	珪質頁岩	A	L ₁	II

撞器	不定形 不整形	3	96	14	$3.85 \times 2.70 \times 0.98$	22	珪質頁岩	AN ₂ P ₁₂ I
			97	15	$3.42 \times 2.00 \times 0.87$	9	めのう	AN _{1b} B ₁ II
			98	16	$3.20 \times 2.08 \times 1.06$	10	"	AN _{1b} B ₁ II
石棺	定形 標準形	3	99	1	$6.98 \times 1.35 \times 1.05$	10	珪質頁岩	A K ₁ II上
			100	2	$6.28 \times 3.22 \times 1.18$	30	"	AN ₂ P ₁₂ I F
			101	3	$4.65 \times 2.60 \times 0.66$	10	"	AN ₂ R ₁₃ II
磨製 石斧	定形 (兩刃)	3	102	1	$\frac{P_{ch}}{5.99} \times 4.40 \times 3.03$ (次)	128	花崗閃綠岩	AN ₂ B ₁ II
			103	2	$11.28 \times 4.13 \times 2.31$	270	ホルンフェルス	AN _{1b} A ₂ II
			104	3	$7.36 \times 4.34 \times 0.86$	62	千枚岩	A L ₂ II F
			105	4	$7.22 \times 4.12 \times 2.76$ (半次)	182	ホルンフェルス	A K ₁ II F
			106	5	$2.98 \times 1.66 \times 1.29$	10	めのう	A K ₂ II
			107	6	$7.32 \times 5.08 \times 1.49$ (半次)	82	頁岩	AN _{1b} B ₁ II
			108	7	$10.1 \times 4.9 \times 2.35$	234	ホルンフェルス	A K ₂ III
			109	8	$9.72 \times 4.0 \times 2.32$ (次)	150	"	A K ₂ III
			110	9	$5.22 \times 6.29 \times 2.56$ (上半次)	90	"	AN ₂ M ₁₃ II F
			111	10	$6.73 \times 3.20 \times 2.62$ (下半次)	80	"	AN ₂ M ₁₃ II F
石斧	小形 定形 (擦切)	4	112	11	$2.45 \times 1.20 \times 0.52$ (上半次)	3	綠色凝灰岩	AN ₂ M ₁₃ II
			113	12	$6.62 \times 3.30 \times 1.28$ (次)	48	ホルンフェルス	AN ₂ N ₁₂ II
			114	13	$5.06 \times 2.81 \times 0.9$	20	"	AN ₂ N ₁₀ I F
			115	14	$2.28 \times 1.79 \times 1.05$ (次)	10	"	AN ₂ R ₁₃ II
			116	15	$4.50 \times 3.40 \times 2.80$ (次)	60	玢岩	
			117	1	$14.04 \times 2.53 \times 1.55$ (残次)	90	粘板岩	AN ₂ P ₁₃ V
石棒	石斧状 切り目	4	118	2	$11.80 \times 2.51 \times 1.51$ (残次)	70	珪化木	AN _{1b} B ₁ III
			119	3	$17.3 \times 2.31 \times 2.03$ (残次)	98	粘板岩	AN _{1b} B ₁ II
			120	4	$8.32 \times 3.32 \times 3.01$ (擦切している)	78	石英玢岩	A K ₂ III
			121	5	$13.87 \times 2.68 \times 1.75$ (擦切)	70	千枚岩	AN _{1b} B ₁ II上
			122	6	$14.35 \times 2.85 \times 1.59$	92	粘板岩	A K ₂ II
			123	1	$13.17 \times 4.69 \times 2.38$ (切目あり)	240	玢岩	AN ₂ P ₁₃ I
石錐	4	4	124	2	$4.72 \times 5.96 \times 1.76$ (切目あり)	48	頁岩	AN ₂ N ₁₃ II
			125	3	$5.42 \times 5.96 \times 1.76$	53	添石質凝灰岩	AN _{1b} B ₁ III
			126	1	$4.02 \times 0.80 \times 0.51$	2	珪質頁岩	A K ₂ III
石錐	4	4	127	2	$4.41 \times 2.14 \times 0.87$	10	"	A K ₁ II F
			128	3	$4.51 \times 1.55 \times 1.19$	10	"	AN ₂ R ₁₃ IV F

石皿	橢円形	4	129	1	$10.16 \times 9.42 \times 6.10$	823	石英安山岩	AN ₁ b N ₁₁ II _F	
			130	2	$15.8 \times 11.79 \times 5.28$	kg 1.47	流紋岩	AN ₂ M ₁₀ II	
			131	3	$12.68 \times 8.60 \times 3.56$	550	安山岩	AN ₁ b B II	
			132	4	$16.90 \times 11.4 \times 4.51$	kg 930	凝灰岩	A L ₂ II	
	大型	5	133	5	$13.46 \times 5.89 \times 3.80$	220	"	AN ₁ b A ₂ II	
			134	6	$11.45 \times 7.62 \times 2.06$	180	"	AN ₁ b B ₁ II	
			135	7	$13.7 \times 10.5 \times 4.60$	620	綠色凝灰岩	AN ₁ b A ₂ II	
			136	8	$14.8 \times 11.15 \times 4.57$	690	凝灰岩	AN ₁ b B ₁ III	
		6	137	9	$28.6 \times 16.76 \times 7.46$	kg 2.21	流紋岩	A K ₂ III	
			138	10	$18.75 \times 11.59 \times 8.10$	kg 1.45	凝灰岩	AN ₁ b A ₂ II	
			139	11	$10.84 \times 12.76 \times 4.60$	kg 1.1	流紋岩	AN ₂ N ₁₁ II	
			140	1	$6.28 \times 5.65 \times 1.50$	72	"	AN ₂ Q ₁₁ I _F	
巖石 (凹盤) (平盤) (状)	不 方 整 形	6	141	2	$6.17 \times 5.88 \times 1.42$	80	"	AN ₂ Q ₁₁ I _F	
			142	3	$8.05 \times 7.05 \times 2.01$	120	"	AN ₂ N ₁₀ II _F	
			143	4	$7.0 \times 6.38 \times 1.94$	100	"	AN ₂ N ₁₀ II _F	
			144	5	$7.73 \times 6.98 \times 2.38$	160	"	AN ₂ N ₁₀ II _F	
	橢 円形		145	6	$6.25 \times 6.15 \times 2.23$	110	"	AN ₂ N ₁₀ II _F	
			146	7	$6.42 \times 6.31 \times 3.06$	145	"	AN ₂ N ₁₀ V	
			147	8	$5.54 \times 5.33 \times 1.46$	45	"	AN ₂ N ₁₃ III	
			148	9	$7.16 \times 7.20 \times 3.28$	200	凝灰岩	AN ₂ M ₁₀ V	
	不 台 整 形		149	10	$7.40 \times 6.29 \times 1.56$	100	流紋岩	AN ₁ b B ₁ II	
			150	11	$5.75 \times 6.30 \times 2.82$	68	泥岩	AN ₁ b B ₁ II	
			151	12	$5.48 \times 5.08 \times 1.81$	60	流紋岩	AN ₁ b B ₁ II	
			152	13	$5.82 \times 3.52 \times 1.62$	40	"	AN ₁ b B ₁ II	
	橢 円形		153	14	$5.69 \times 5.98 \times 1.40$	60	"	AN ₂ Q ₁₃ IV _上	
			154	15	$6.38 \times 5.78 \times 2.06$	60	"	A K ₂ III	
			155	16	$7.38 \times 7.60 \times 1.49$	140	"	AN ₂ M ₁₃ II	
			156	17	$7.78 \times 6.08 \times 3.44$	190	"	AN ₂ M ₁₃ II	
	内 形		157	18	$4.60 \times 4.18 \times 1.98$	20	泥岩	AN ₁ b B ₁ III	
			158	19	$6.59 \times 5.99 \times 3.19$	28	石英安山岩	AN ₂ 2構内 VI _F	
			159	20	$4.46 \times 4.51 \times 1.55$	13	泥岩	AN ₂ Q ₁₃ I	
			160	21	$6.05 \times 6.60 \times 1.99$	90	シルト岩	AN ₂ b B ₁ II	
	不 方 整 形		161	22	$7.67 \times 6.28 \times 1.27$	95	流紋岩	AN ₁ b B ₁ II	

扁石 平器 (円盤) (状)	6	162	23	4.65×5.31×1.18	38	流紋岩	AN ₁ b B ₁ II
		163	24	5.26×4.29×1.15	32	"	AN ₁ b B ₁ II
		164	25	7.5×7.50×1.89	195	"	AN ₁ b B ₁ II
		165	26	6.28×5.58×1.50	80	"	A L ₁ II
		166	27	8.11×4.75×2.02 (欠)	120	めのう	AN ₁ b B ₁ II
		167	28	5.08×5.03×1.85	70	流紋岩	AN ₁ b B ₁ III
		168	29	6.22×6.8×1.49	60	"	AN ₁₂ N ₁₁ II
		169	30	11.3×10.6×3.82	585	"	AN ₂ M ₁₀ II
		170	31	3.46×4.42×4.32 (欠)	70	"	AN ₂ M ₁₀ V
		171	32	7.48×1.90×1.30 (欠)	70	"	AN ₁ b A ₂ II
		172	33	6.48×6.10×1.62	100	"	A K ₂ III
タタキ 石	6	173	1	12.9×8.12×5.51	998	玢岩	AN ₂ Q ₁₂ I
		174	2	10.3×7.88×5.12	640	花崗閃綠岩	AN ₁ b B ₁ II
		175	3	10.64×6.31×3.42	354	花崗斑岩	A K ₂ II
		176	4	7.60×5.38×2.70 (未成みり)	180	花崗閃綠岩	AN ₂ M ₁₁ II
		177	5	10.9×7.27×5.10	570	"	AN ₂ N ₁₀ V
		178	6	5.67×5.45×2.68	220	"	AN ₂ Q _{11~12} V
		179	7	9.02×6.62×2.72 (欠)	285	"	AN ₂ M ₁₃ II
		180	8	9.16×6.05×4.82 (2号井内)	400	流紋岩	AN ₂ Q _{13~14} V
		181	9	14.6×5.39×4.36 (未成みり)	592	玢岩	A K ₂ II
		182	10	15.39×5.54×3.86	372	泥岩	AN ₁ b B ₁ II
		183	11	6.45×6.94×4.66 (欠)	270	花崗閃綠岩	A K ₂ III
		184	12	6.76×7.28×2.60	190	"	AN ₂ Q ₁₃ II
		185	13	10.62×7.94×3.42	150	"	AN ₂ M ₁₀ II
		186	14	12.53×5.79×3.46	395	"	A K ₂ II
クボミ 石	7	187	1	8.62×6.24×4.41	180	泥岩	AN ₂ Q ₁₃ V
		188	2	12.2×5.61×5.98	420	凝灰岩	AN ₂ N ₁₀ V
		189	3	15.8×8.55×4.49	530	シルト岩	AN ₁ b B ₁ II
		190	4	21.0×9.08×3.37	500	"	AN ₂ P ₁₃ I
		191	5	12.86×5.89×3.3	295	凝灰質砂岩	AN ₁ b B ₁ II
		192	6	9.08×5.85×5.72	272	泥岩	AN ₂ M ₁₃ II
		193	7	8.10×5.04×3.81	140	"	AN ₂ P ₁₂ I
		194	8	10.3×6.70×4.06	335	凝灰岩	AN ₂ P ₁₃ I

クボミ 石	不定形 球形	7	195	9	$9.47 \times 5.94 \times 2.61$	153	凝灰岩	AN ₂	P ₁₂	I _F	
			196	10	$9.82 \times 7.31 \times 2.55$	110	泥岩	A	M ₁₁	II	
			197	11	未記あり (テテキ石?) $8.84 \times 8.0 \times 7.08$	662	安山岩	AN ₂	P ₁₂ ²⁰⁴ M ₁₀	V _L	
			198	12	$11.02 \times 6.18 \times 5.39$	328	緑色凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			199	13	$15.8 \times 7.54 \times 4.95$	560	凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	II	
	不定形		200	14	$8.68 \times 6.35 \times 2.46$	114	泥岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			201	15	$6.88 \times 5.16 \times 3.86$	198	凝灰質砂岩	AN _{1b}	A ₂	II	
			202	16	$8.72 \times 6.96 \times 4.15$	215	緑色凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	III	
			203	17	$10.18 \times 8.69 \times 4.95$	370	泥岩	A	K ₁	III	
			204	18	$13.95 \times 6.22 \times 3.08$	410	凝灰質砂岩	AN ₂	N ₁₂	II _F	
石彈 (球形)	8	8	205	1	$6.70 \times 6.42 \times 6.30$	240	凝灰岩	A	K ₂	III _L	
			206	2	$6.01 \times 6.24 \times 6.20$	262	"	AN ₂	M ₁₂	V	
			207	3	$5.48 \times 5.49 \times 4.51$	112	泥岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			208	4	$4.85 \times 4.50 \times 4.90$	55	浮石質凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			209	5	$4.01 \times 4.69 \times 4.57$	140	珪質頁岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			210	6	$5.37 \times 5.05 \times 5.49$	78	凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			211	7	$4.31 \times 4.71 \times 4.72$	70	"	A	K ₂	III	
			212	8	$5.46 \times 5.43 \times 5.54$	130	"	AN ₂	R ₁₂	V _L	
			213	9	$4.32 \times 4.28 \times 4.19$	78	"	AN ₂	N ₁₁	V	
			214	10	$4.66 \times 4.51 \times 4.37$	80	"	AN _{1b}	B ₁	III	
使用痕 のある 扁平石 器 (磨痕) (タタ) (キ痕)	不整円 (円形)	8	215	1	$6.02 \times 4.62 \times 1.82$	80	めのう	A	K ₂	II	
			216	2	$5.16 \times 4.04 \times 1.21$	40	流紋岩	AN _{1b}	A ₂	II	
			217	3	$6.37 \times 3.46 \times 1.08$	40	頁岩	AN _{1b}	B ₁	II	
			218	4	$5.59 \times 3.42 \times 1.0$	30	流紋岩	AN ₂	N ₁₃	II	
			219	5	$5.0 \times 4.38 \times 0.92$	18	頁岩	AN ₂	B ₁	II	
			220	6	$5.38 \times 4.82 \times 1.35$	50	流紋岩	AN ₂	R ₁₃	IV _F	
			221	7	$5.55 \times 2.42 \times 0.62$	14	頁岩	AN ₂	N ₁₃	II	
			222	8	$5.85 \times 3.42 \times 1.05$	30	玢岩	AN _{1b}	B ₁	II	
	楕形		223	9	$5.45 \times 2.54 \times 1.58$	40	頁岩	A	K ₂	III _L	
			224	10	$6.15 \times 4.01 \times 1.22$	50	"	A	K ₂	III	
打欠き のある 扁平石 器	8	8	225	1	$7.79 \times 4.03 \times 1.32$	62	流紋岩	A	K ₂	II	
			226	2	$8.32 \times 5.21 \times 1.62$	112	"	AN _{1b}	B ₁	II	
			227	3	$5.81 \times 4.56 \times 0.92$	32	"	AN ₂	Q ₁₁	II _F	

打欠き のある 扁平石 器		8	228	4	6.18×5.65×1.65	90	花崗岩	AN ₂	M ₁₃	II
			229	5	6.14×4.58×1.0	22	泥岩	AN _{1b}	B ₁	II
異 石 形 器	三角状	8	230	1	3.39×3.21×0.94	10	珪質頁岩	AN _{1b}	B ₁	II
	円 杯 形		231	2	6.75×5.0×2.40 <small>(縫合あり)</small>	52	頁岩	AN _{1b}	B ₁	III
	円 尖 部 クボミ 平 形		232	3	6.67×5.71×1.99	45	泥岩	A	L ₁	III
	大 形		233	4	12.58×9.07×1.58	168	凝灰岩	AN _{1b}	A ₂	II
	小 柱 状		234	5	2.99×1.83×1.37	10	ホルンフェルス	AN ₂	M ₁₀	II
	勾 玉		235	1	3.06×1.73×0.81	6	碧玉	A	K ₂	III _上
垂飾品	穿孔の あるも の (小玉)	9	236	2	0.64×0.72×0.65	1	緑色凝灰岩	AN _{1b}	B ₁	II
			237	3	0.82×0.80×0.55	1	"	AN _{1b}	B ₁	II
			238	4	0.60×0.62×0.52	1	碧玉	A	K ₂	III
			239	5	0.61×0.62×0.45 <small>(縫合あり)</small>	1	凝灰岩	A	K ₂	III
	完浦孔 のある もの		240	6	2.41×1.46×0.76		緑色凝灰岩	AN ₂	R ₁₃	II _T
			241	7	4.50×2.94×1.0 <small>(縫合あり)</small>	10	泥岩	A	K ₂	III
			242	8	6.58×5.05×3.02	90	"	AN ₂	N ₁₃	II
			243	9	5.62×4.32×2.04	60	"	AN _{1b}	B ₁	II
			244	10	3.58×2.23×0.65 <small>(+縫合併合)</small>	10	めのう	AN _{1b}	B ₁	II
	未完通 穿孔の あるも の		245	11	1.78×0.83×0.81	1	碧玉	AN _{1b}	B ₁	II
	完浦孔 のある もの		246	12	0.90×0.81×0.50	1	"	AN _{1b}	B ₁	II
			247	13	4.42×4.72×	32	玉髓	A	K ₂	III
縫割石	不規形	9	248	1	2.41×3.27×1.0 <small>(欠)</small>	8	泥岩	A	L ₁	II
	扁 平 形		249	2	2.05×1.88×0.65	2	"	A	L ₁	II _J
	円 平 形		250	3	8.32×7.0×2.28 <small>(欠)</small>	90	"	A	K ₁	II
	圓 扁 形		251	4	6.12×6.08×1.65 <small>(欠)</small>	40	頁岩	A	L ₁	II
	卵 形 破 片		252	5	4.39×4.28×1.83 <small>(欠)</small>	18	泥岩	AN _{1b}	B ₁	III
	薄 丸 形 平方形		253	6	9.42×7.28×5.08	210	"	AN _{1b}	B ₁	II
鉢 型 品	楕 円 形	10	254	7	12.8×8.42×2.22	210	シルト岩	AN ₂	M ₁₀	II _F
	卵 形		255	1	4.92×4.48×3.22 <small>(欠)</small>	10	浮石	AN _{1b}	B ₁	II
	隅 方 丸 形		256	2	5.22×5.75×1.66 <small>(欠)</small>	8	"	AN _{1b}	B ₁	II
			257	3	7.16×5.82×1.98	30	"	A	K ₁	II _T
			258	4	6.12×5.19×2.45 <small>(欠)</small>	20	"	AN _{1b}	B ₁	III
			259	5	8.87×6.55×2.10	50	"	AN _{1b}	B ₁	II
	細 長 形		260	6	14.5×7.28×4.29	170	"	AN _{1b}	B ₁	II

鉛 石 品	不 整 形 圓 丸 不 整 台 形 扁 橢 圓 形	10	261	7	8.39×6.95×2.99	42	浮 石	A	K ₂	III	
			262	8	9.34×7.20×4.82	80	"	AN ₁ b	B ₁	III	
			263	9	13.65×7.35×2.27	72	"	A	K ₁	II	
岩 偶		11	264	1	5.82×4.69×4.05	68	泥 岩	A	L ₁	I	
石 冠		11	265	1	13.4×17.4×5.89	870	頁 岩	AN ₂	Q ₁₃	V	
			266	2	16.8×13.56×4.10	510	玲 岩	A	K ₂	II	
			267	3	7.24×10.84×3.78	394	英 崗 岩	A	M ₁₃	II	
扶 入 器		11	268	1	4.31×5.06×1.74	40	流 紋 岩	AN ₁ b	B ₁	II	
原 石	綠 色 原 石	11		1		3	ホルンフェルス	A	K ₂	III ₁	
				2		2	碧 玉	A	K ₂	III ₂	
				3		1	"	AN ₁ b	B ₁	II	
				4		1	ホルンフェルス	AN ₁ b	N ₁₃	II	
				5		1	緑色凝灰岩	AN ₁ b	B ₁	II	
	自然石			6		30	"	AN ₁ b	B ₁	II	
				7		40	碧 玉	AN ₁ b	B ₁	II	
				8		10	"	AN ₁ b	A ₂	II	
				9		10	"	AN ₁ b	B ₁	III	
				10		20	"	AN ₁ b	B ₁	II	
	桃 花 形 クサビ 形			11		50	ホルンフェルス	A	K ₂	III	
				12	1.88×1.18×0.87	4	藍 灰 岩	A	K ₂	III	
				13		20	鐵 石 英	A	L ₂	II	
				14		10	"	AN ₁ b	A ₂	II	
				15		10	"	AN ₁ b	A ₂	II	
	赤 原 色 石			16		10	"	A	K ₂	II	
				17		20	"	A	K ₂	III	
				18		10	黑 曜 石	AN b	B ₁	II	
				19		3	"	A	K ₂	III	
				20		2	"	A	K ₂	II	
	黑 曜 石			21		3	"	A	K ₂	II	
				22		10	"	A	K ₂	II	
				269	1	15.1×5.76×2.87	150			AN ₁ b A ₂ III ₁	
鉛 製 品	鉛	b·P·L 4	"	2	11.28×3.6×1.56	70				AN ₁ b A ₂ III ₂	
			270	3	12.34×2.35×1.02	40	同 一 個 体	AN ₁ b	A ₂	I	

鉄製品	刀子		270	44	$7.45 \times 2.20 \times 0.57$	20	同一個体	A N ₁ b A ₂ I
般類 (米・ヒエ)	焼失 家屋内 炭化木	b·P·L 3	1		$0.51 \times 0.28 \times 0.28$			A N ₁ b B ₁ III
			2		$0.51 \times 0.31 \times 0.215$			A N ₁ b B ₁ III
			3		$0.52 \times 0.28 \times 0.20$			A N ₁ b B ₁ III
			4		$0.52 \times 0.32 \times 0.16$			A N ₁ b B ₁ III
			5		$0.52 \times 0.26 \times 0.20$			A N ₁ b B ₁ III
			1		シャレーー 1 こ			A N ₁ b B ₁ III
古銭	寛 通 永 宝	b·P·L 2	1		$2.38 \times 2.49 \times 0.11$			堀外 Y z II
			2		$2.45 \times 2.46 \times 0.18$			堀外 Y z II
			3		$2.31 \times 2.30 \times 0.11$			堀外 Y z II
			4		$2.36 \times 2.36 \times 0.125$			堀外 Y z II
			5		$2.48 \times 2.44 \times 0.20$			堀外 Y z II
			6		(2枚重ね) ↑ ↑ $2.28 \times 2.0 \times 0.32$			堀外 Y z II
			7		$2.29 \times 2.285 \times 0.11$			A N ₁ b B ₁ III
			8		(2枚重ね)(欠) $2.58 \times 1.49 \times 1.51$			堀外 Y z III

(3) 石器・石製品 (S・P・L 1~10, 表2)

本年の発掘調査において出土した石器・石製品は全部で268点の出土である。この出土した石器・石製品は、縄文時代の後期・晚期のものを含んでいる。当観音林遺跡は、堀をめぐらせた館址に位置するため、「基本層序」に示すとおり、第V層を除く各層は、移動し混合層をなしているため層位的な把握は不可能な状態であった。そのため、後期・晚期の区別をしないで一括して述べることにする。

出土した石器・石製品268点について、器種別に分類すると、つぎのとおりになる。

①石 器	39, 14.55 %	②削 器	43, 16.04 %
③攝 器	16, 5.97 %	④石 槍	3, 1.12 %
⑤石 斧	15, 5.60 %	⑥石 棒	6, 2.24 %
⑦石 錘	3, 1.12 %	⑧石 錐	3, 1.12 %
⑨石 盆	11, 4.10 %	⑩扁 平 石 器	33, 12.31 %
⑪タ タ キ 石	14, 5.22 %	⑫ク ボ ミ 石	18, 6.72 %
⑬石 弹	10, 3.73 %	⑯使用痕のある 扁 平 石 器	10, 3.73 %
⑮打欠きのある 扁 平 石 器	5, 1.87 %	⑰異 形 石 器	5, 1.87 %
⑯垂 飾 品	13, 4.85 %	⑱線 刻 石	7, 2.61 %
⑰輕 石 製 品	9, 3.36 %	⑲岩 偶	1, 0.73 %
⑲石 冠	3, 1.12 %	⑳抉 入 石 器	1, 0.73 %

以上の22にわたる器種である。このうち、⑰・⑲・⑳・㉑は、文化遺物である。これらの石器・石製品は、「基本層序」に示す、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層・V層上面より出土したが、IⅡ層は再堆積層であり、Ⅲ層は原黒土であるが発掘区の一部に残る状態である。Ⅳ層はや安定した層であるが、部分的に存在する。

また、V層はベースであるが、出土した石器・石製品は、その上面で出土した。なお、主包含層は、再堆積のⅡ層とした黒土層である。

つぎに、出土した石器・石製品を岩質別に分類してみると、つぎのとおりである。

①珪質頁岩	89,	33.21%	⑨めのう	15,	5.60%
③石英片岩	1,	0.73%	④碧玉	7,	2.61%
⑥黒曜石	1,	0.73%	⑥流紋岩	38,	14.18%
⑦花崗閃綠岩	10,	3.73%	⑧ホルンフェルス	10,	3.73%
⑨千枚岩	2,	0.75%	⑩頁岩	10,	3.73%
⑪綠色凝灰岩	7,	2.61%	⑫玢岩	6,	2.24%
⑬粘板岩	3,	1.12%	⑭珪化木	1,	0.73%
⑮石英玢岩	1,	0.73%	⑯浮石	9,	3.36%
⑰浮石質凝灰岩	2,	0.75%	⑯石英安山岩	2,	0.75%
⑯安山岩	2,	0.75%	⑭凝灰岩	19,	7.09%
㉑泥岩	22,	8.21%	㉑シルト岩	4,	1.49%
㉒花崗斑岩	1,	0.73%	㉓凝灰質砂岩	3,	1.12%
㉔花崗岩	2,	0.75%	㉕玉髓	1,	0.73%

以上の27岩質に分けられる。また、石器・石製品に使用される岩質の石器・石製品総数268点に占める%を計算すると、既に示したとおりである。

すなわち、珪質頁岩33.21%、流紋岩14.18%、泥岩8.21%、めのう5.6%、花崗閃綠岩・ホルンフェルス、頁岩、浮石等が多い。

しかし、石器の器種に影響されるので出土器種との関連で考える必要がある。

般音林遺跡（第七次）出土、骨類鑑定表

(表4)

1988.07.16～08.02

鑑定者 金子 浩昌

資料 No.	出土区、層	記 録	出土状況	備 考
(1)	A地区 K 2 III層	獣骨片であるが、径5mm程の管状の骨がある。大型と中型獣との両方を含む。	・K 2 グリット南壁に散布。	☆(1)～(4)は、いずれもI・II・IV層は、館址内のため、削平されたりして動いている。
(2)	A地区 K 2 III層	ウマの四肢骨片と思われる形状の似た骨なので、同種、同個体の骨ではないか。	・3片まとまって出土。	
(3)	A地区 K 2 III層	獣骨片。	・散布。	☆III層は、原黒土。（第七次基本層序参照）
(4)	A地区 K 2 III層	石片。	・黒土に混入して単独出土。	☆I・II・IV層には、「十脚内I・II、晚期C1～A式、土器、土師器第二型式、須恵器出土。
(5)	A地区 L 1 III層	焼けた獣骨片。 シカのような大型獣であろう。	・散布。	
(6)	AN 1 b 地区 B 1 II層	焼けた獣骨片。 シカのような大型獣であろう。	・単独出土。	☆V層はベース、遺構は、すべてV層を掘り込んでいる。
(7)	AN 1 b 地区 B 1 III上層	焼けた骨である。形状の違う二つの骨である。一点は鳥骨片らしく、他はシカなどの肢骨片らしい。擦痕と溝のような凹みがある。	・散布。	・住居址、カマド、土壤柱穴、井戸、等である。
(8)	AN 2 地区 N 10 V層	焼骨。 人骨の可能性がある。	・V層を掘り込んだ8号土壙底面より検出。	・遺構は、土師、十脚内、晚期のものである。
(9)	AN 2 地区 M 11 (No. 179)	1点は現代の木片。 1点は石灰質であるが、骨かどうか不明。	・土壙内覆土より検出。土壙は、土師器時代のもの。	
(10)	AN 2 地区 2号井戸内	微小の小骨片。(焼骨) 獸骨であろう。	・館址内、2号井戸内V層上面より1.85m下。	・桜井第二型式の土師器を伴う館址内の井戸より出土。

☆(9) M 11 (No. 179) は土壤番号である。

資料 No	出土区、層	記 録	出 土 状 況	備 考
(12)	A N 2 地区 Q 11 V 層	焼けた獸骨微小破片。	・V 層上面に散布。	繩文土器を包含する。
(13)	宮地表探	ニワトリ、幼体、鹿骨。 現代のもの	・館跡外の宮地、土 取り場より表探。	

{ ☆資料No. (11) 次 }

(4) 骨類・鉄製品・植物遺存体(炭化米・ヒエ)・古錢 (b・P・L 1~4, 表4・5)

④骨類

出土した骨類は、いずれも微小細片であって、むしろ骨粉と表現する方が正確である。

第七次発掘調査では、(表4)に示したとおり、A地区→K 2、L 1 グリット、A N 1 b 地区→B 1 レンチ、A N 2 地区→N 10、M 11、Q 11、およびA N 2 地区→2号井戸内、等で検出したものである。また、(13)としたものは、本遺跡の東側に位置する通称宮地の土取り場で表探したものである。

本遺跡で出土した骨類については、一貫して、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼してきた。第七次発掘調査で出土した骨類も同様であって、(表4)に示す鑑定結果をいただいた。ここに感謝申上げる次第である。

鑑定結果について、再度抜き書きすると、次のようになる。

①大型獸 ②中型獸 ③ウマの四肢骨 ④獸骨片 ⑤シカのような大型獸 ⑥鳥骨片、シカなどの肢骨片 ⑦焼骨片(人骨の可能性もある。) ⑧獸骨片 ⑨獸骨微小破片

・鑑定していただいた(1)~(3)のうち、(4)、(9)、(13)を除き上から順に抜き書きすると以上のようになる。

すなわち、〔獸骨・ウマ・シカ・人骨?〕等に分けられよう。

出土した骨類の中には焼けたものがあることに注意していきたい。

・本遺跡において出土した骨類を再掲してみると、次のようにまとめられる。(第二~第七次発掘調査で出土した骨類)

①シ	カ	②イノシシ	③イ	ヌ	④タ	ス	キ	⑤キ	ツ	ネ
⑥イ	ル	カ	⑦ア	シ	カ	⑧ノウサギ	⑨魚	骨	⑩鳥	骨
⑪テ	ン	⑫ネズミザメ	⑬ウ	マ	⑭人	骨?				

以上、14種になるが、いずれも微小な骨粉状のものである。

また、これらの検出した骨類は、焼けたものが多い点は、第二次～第七次発掘調査とも共通している。

残念なことは、層序が乱れている遺跡であるため、後期、晩期の明確な区別がつけられない点に難点があるが、出土状況の観察からすれば、晩期のものが多いように観察される。

⑥植物遺存体（炭火米・ヒエ）—（b・P・L 1～4、表5・第9図）

このものは、AN 1 b-A 2 トレンチのⅢ層上面で、一部検出した「カマド」を備えた焼失家屋の床面上で検出したものである。

出土量は、「炭火米」が約2ℓ、ヒエは、約3ℓと出土量は多い。

この二種は、第9図に示すとおり、A 2 トレンチの東壁下で検出された。

この出土層はⅢ層であるが、第5図に示すとおり、原黒土層である。

未だ完掘してないので、住居址のプラン等は不明であるが、出土した炭火米・ヒエについて、津軽植物の会々長、日本植物学会々員、木村 啓氏に鑑定を依頼し、（表5）の鑑定結果をいただいた。ここに記して感謝申上げる次第である。

すなわち、鑑定結果によれば、〔イネ・ヒエ〕である。

・第二次～第七次発掘調査において出土した植物遺存体については、一貫して木村 啓氏に鑑定していただいている。それをまとめると下記のようになる。

①ミズナラ	②ブナノキ	③オニグルミ	④トチノキ	⑤イネ	⑥ヒエ
-------	-------	--------	-------	-----	-----

このように少しずつではあるが、植生や、食料の問題が明らかになりつつある。

⑦鉄製品（b・P・L 1～4、第9図）

鉄製品は、AN 1 b-A 2 トレンチⅢ層、すなわち、（炭火米・ヒエ）が出土した層と同一層で出土した。

既述したように、焼失家屋の床面上でA 2 トレンチの南壁に刺さった状態で、2片出土

した。このものも、この焼失家屋内のものと考えられる。この鉄製品2片は、同一個体のもので接合する。その形態から「鍼」と考えられる。

出土した他の2片は、表採品であるため、出土地点、出土層は不明であるが（刀子）と考えられる。この2片も同一個体のものである。

なお既述したように、「カマド」を備えた焼失家屋は、未完掘であるため、そのプランが不明である。年代等については完掘後に考えることにしたい。

②古銭（b・P・L 1~4）

出土した古銭は、完全なもの6枚、他に、2枚接合したもの2枚、破片1枚の9枚で出土した。このものは、発掘区外の宮地（通称）に（2m×4m）のトレンチ、「YZ」のⅡ層とした黒色土内から出土したものである。

いずれも「寛永通寶」である。この宮地には、御堂があったと伝えられる地点である。

以上、〔IV〕出土遺物について、その概要を述べた。つぎに出土構、出土遺物、その他について若干の考察を加えてみることにしたい。

☆ 発掘植物鑑定結果

(表5)

1号

①植物名

学名 Oryza Sativa L.

和名 イネ（イネ科）

②鑑定部

炭化した種子多数

③同定の根拠

炭化して形態は、生体時と異っていたが、だ円形であり大きさも合致し、しかもイネ種子の特徴である胚芽（はいが）部分の欠如を認めることができた。

④鑑定者

木村 啓（津軽植物の会々長・日本植物学会々員）

⑤鑑定年月日

平成元年（1989）1月30日

2号

①植物名

学名 *Panicum Crus-galli* L. Var.

Frumentaceum Hook. f.

和名 ヒエ

②鑑定部

炭化した種子多数

③同定の根拠

炭化して形態は生体時と異っていたが、円形であり、大きさはやゝ大きいが、ヒエ種子の特徴である果柄の跡が、はっきりと残っていた。（生時より大形なのは、水分を含んだ後に炭化したためと考えられる。）

④鑑定者

木村 啓（津輕植物の会々長・日本植物学会々員）

⑤鑑定年月日

平成元年（1989）1月30日

〔V〕 考 察

(1) 銀音林遺跡の層序について（第5・6図）

まず最初に大量の後期、晚期の遺物が出土した「A地区」の層序について述べる。

第6図に示したとおり、A地区斜面構成層は、大別して、黒土層と段丘構成層に分けられる。

この段丘構成層は、遺物を含まない構成層であるが、軸を調査する目的もあるので、掲示したものである。

この段丘構成層を除外して、I～IV層は、いずれも黒土層である。しかもこの黒土層は、混合層であって、各層の特徴については、「層序」の項で述べたとおりである。

すなわち、混合層であることは、正常な堆積層ではなく、二次堆積であることを示している。

また、C地区における基本層序（第5図-①）を見ると、原黒土層は、Ⅲ層となって存在し、I層-表土、Ⅱ層-黒色土、となっており、I層-Ⅱ層のつぎにⅢ層（原黒土層）となっていることがわかる。

また、AN2地区（中央区）における層序を観察すると、（第12・13・14図）、原黒土層はない。以上の層序の比較から、遺物包含層である原黒土層は削平されたものと考えることが妥当であろう。

すなわち、本遺跡の各発掘区は、原黒土層が削平され、その後、Ⅲ層とした黒土層が堆積したものと考えることができよう。

AN2地区にⅢ層を欠き、C地区にⅢ層がきわめて厚いことは、（約1.2m）、台地中央部のⅢ層が削平され、北に向って斜面をなす地形に、二次的に堆積したものと考えられる。また、削平されたⅢ層は、南の急斜面にも押されたものと考えられる。A地区的原地形は、急傾斜をなすものらしく、その斜面に混合層が堆積したものとのようである。

このことは、遺物の出土状況からも実証できる。

すなわち、後期の土器群が斜面の上層に、晚期の土器群が下層に出土するという状況である。しかも同じ晚期でも「大洞A式」土器が最下層に多いという状況であった。

本遺跡の舌状台地は、堀があぐり、その堀に囲まれた台地上は、平らに削平されていることは明らかで、縄文である。この縄文を造営する時点で、削平されたものであろう。

(2) 遺構について

〔Ⅲ〕において検出した遺構については既述したとおりであるが、再度述べると、①住居址、②土壙、③井戸、④地床炉、⑤カマド、⑥溝状遺構、⑦柱穴群に大別される。

各遺構とも、第Ⅳ層を掘り込んで造られているが、このうち、長方形プランの住居址はカマド、地床炉を備えたものであるが、平安時代後葉の年代が与えられる。

また、2号井戸、溝状遺構、地床炉、等も同時期と考えてよいであろう。

しかし、土壙のうち、既述したように、後期のもの、および、住居址のうち、不整な円形プランのものは、縄文期（後期～晩期）のものと考えられるが、資料的な確証に乏しい。

さらに多数の柱穴群を検出したが、時期決定のきめ手を欠き断定はできない。

しかし、出土遺物から考えて、土師器使用期の遺構が主体であることは間違いないところと考える。

最も問題となることは、館址を造営した時期と、堀の問題である。現時点において明らかなことは、堀は、カマドを備えた住居址を切っていると云う事実である。

このことも、切られた住居址よりも堀は新しいと言える程度で、これを持って全体を捉えることは危険であろう。

(3) 出土遺物について

出土した遺物については、〔IV〕において述べた。また、C・P・L、P・P・L、S・P・Lにおいて、それぞれ掲示し、土器については、個々について述べてあるので省略するが、若干の問題点について考察を加えてみる。

①出土、土器について

②出土した土器群のうち、第4群、第5群後葉の土器についてまず述べる。

・縄文時代後期の土器は、青森県下においては、「十腰内I～V式」として型式編年されてきたのであるが、本遺跡においては、「十腰内I式」としては処理しきれない一群の土器が、第四次～第七次発掘調査において出土があり、類例は、北海道「白坂」遺跡、蛇間遺跡（S53考古学雑誌第63巻第4号 鷹野光行）、崎山弁天遺跡（S49草間俊一 岩手県大槌町教育委員会）、四ツ石遺跡（1986 葛西勵他）等に見られ、北海道から岩手県までも分布が見られるようである。また、鷹野光行氏の御教示によれば、北海道礼文島「船泊上層式」にも類例が見られると云う。

また、「白坂」第3地点出土の土器群を、「大津式」「手稻式」の間をつなぐものとして位置づけられている。

本遺跡出土の第4群土器は、「白坂」のそれにしたがうと、本県で云う「十腰内I・II式」の間をつなぐ土器群となる。なお、筆者の意見では、「十腰I式」の文様要素が、第4群土器に多く残存すると考えている。

また、第5群土器とした「十腰内II式」後葉に位置づけた土器は、前述の「崎山弁天遺跡」第V群4類、に類例が見られる。

これらの、第4群・第5群後葉の土器は、資料の増加を待って、さらに考えたい。

⑤第8群土器について

第七次発掘調査において、第8群土器として分類したものは、わずか2個体分である。

第二～六次調査においては、常に出土があったのであるが、今年度の出土は少ない。

しかし筆者は、「大洞C2式」と「大洞A式」の文様要素を備えたものとして、「大洞C2-A式」とする仮称を与えてきた。（1983、新谷）

その後、北海道「聖山遺跡」において良好な資料を得た、飯島義雄氏は、この一群の土器を「聖山式」と型式名付けられている。

当地方における類例は、市浦村「五月女蕪遺跡」および当遺跡の2ヶ所で今後類例が増加する可能性がある。

⑥石器について

石器についても(3)において述べてきたので省略するが「線刻石」についてのみ述べることにする。本遺跡においては、第四次～第六次発掘調査において、線刻石が6件出土しており（うち1件は後期・他は晩期）、今回の第七次発掘調査においては、6件出土したが、すべて晩期のものである。また、S・P・L1～11に述べた石器は、後期～晩期のものを含んでいることを付記しておく。

⑦その他、骨類は焼骨が多く見られるが、本年は、ウマが追加されている点に注目したい。鉄器には鍬が出土し、炭化米、ヒエが出土した。当地方における農具の発見と、米作り、ヒエの栽培等、発掘成果は大きいものがあったように思う。

〔新谷記〕

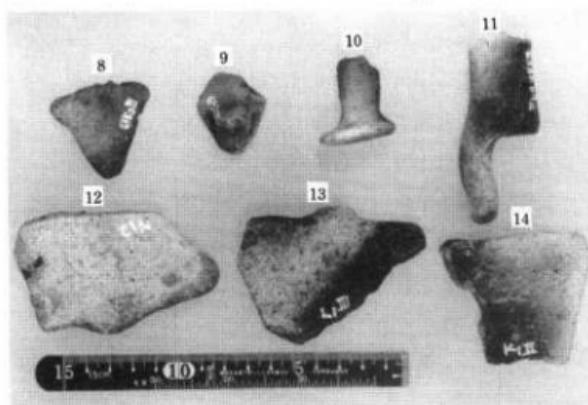
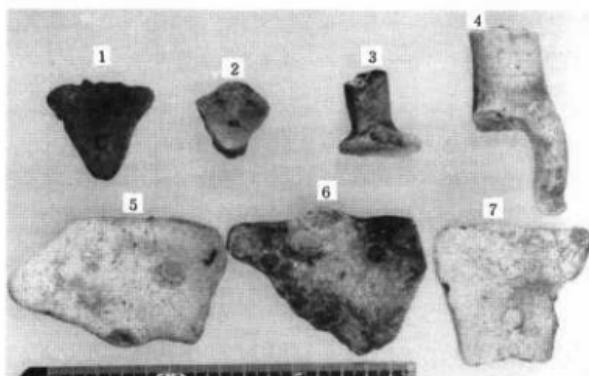
☆参考文献

- ①観音林遺跡 第一～第六次発掘調査報告書
五所川原市教育委員会
- ②五月女菴遺跡 (1983) 市浦村教育委員会
- ③亀ヶ岡式土器 (1984) 村越 潔
ニューサイエンス社
- ④「白坂」 (1983) 山岸英夫
北海道松前町教育委員会
- ⑤北奥古代文化 (1975) 平山久夫編
学 生 社
- ⑥亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書
(1974) 青森県教育委員会
- ⑦燃糸文 第15号 (1986) 青森山田高校 考古学研究部
- ⑧北海道における縄文時代後期中葉の土器編年について
(1977) 鷹野光行 考古学雑誌 第63巻 第4号
- ⑨崎山弁天遺跡 (1973) 岩手県大槌町教育委員会
- ⑩長森遺跡発掘調査報告書
(1985) 青森市教育委員会
- ⑪亀ヶ岡式土器の編年について
(1988) 飯島義雄他 縄文文化検討会
- ⑫今津遺跡 (1985) 青森県教育委員会
- ⑬石器時代の日本 (1960) 芹沢長介 築地書館
- ⑭岩木山 (1968) 村越 潔編 岩木山刊行会
- ⑮津軽・前田野目窯址 (1968) 坂詰秀一 五所川原市教育委員会

〔土偶〕

C • P • L 1

- | |
|-----------------|
| 1 AK 2 |
| 2 AL 2 |
| 3 AK 1 |
| 4 AN 1 b-A 2 II |
| 5 N 12 II |
| 6 AL 1 III |
| 7 AK 1 II |



〔土偶〕 - (1~14)

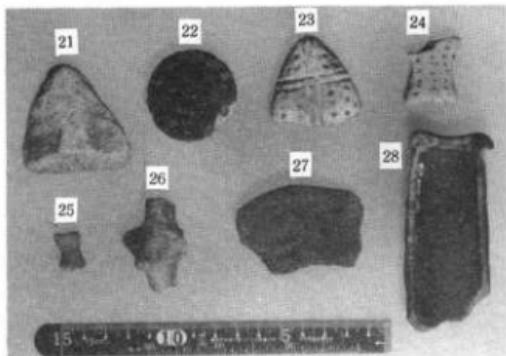
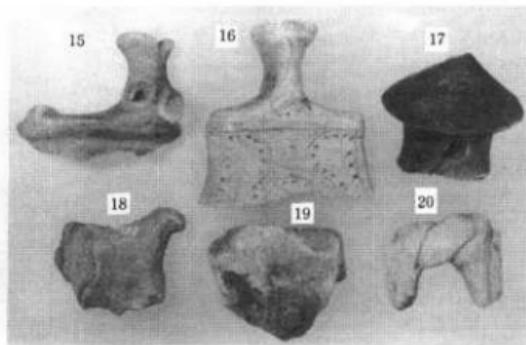
- | | |
|-----------|------|
| 1 小形板状土偶 | } 中期 |
| 2 土偶顔面 | } 晩期 |
| 3 土偶脚部 | } 後期 |
| 4 土偶胸~脚部 | |
| 5 板状土偶上半部 | } 中期 |
| 6 ククククククク | |
| 7 板状土偶上半部 | |

〔土製品〕

C・P・L 2

- 15 A K 2 Ⅲ
16 A K 2 Ⅲ
17 A N 1 b - B 1 Ⅲ
18 Q 12 Ⅰ
19 N 11 Ⅱ
20 A K 2 Ⅲ

☆ (15・16・17・20) は、「十腰内式」の把手、(18・19) は、土偶。



- 21 A K 1 Ⅲ
22 A L 2 Ⅲ
23 A K 1 Ⅲ
24 A K 2 Ⅲ
25 A K 1 Ⅲ
26 A K 1 Ⅲ
27 A L 2 Ⅲ
28 A K 2 Ⅲ

☆ (21・23) 三角形土製品
☆ (22) ペンダント状土製品
☆ (24) 糸まき形土製品
☆ (25) 耳栓
☆ (26) 異形土製品
☆ (27) 土器口頸部
☆ (28) 舟形土製品

後期

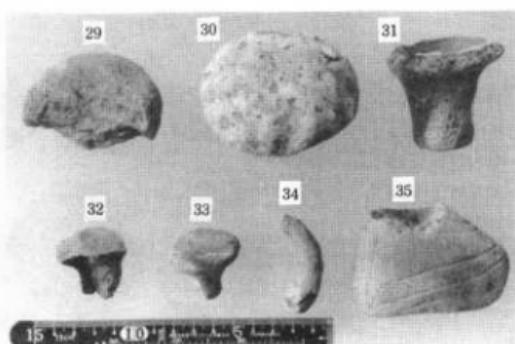
十腰内式

中期末

晩期

- | | |
|------------|----------|
| 29 A K 1 Ⅲ | } 芽形土製品 |
| 30 A L 1 Ⅲ | |
| 31 A K 2 Ⅲ | } 土器脚部 |
| 32 A K 2 Ⅲ | |
| 33 A K 1 Ⅲ | } 芽形土製品 |
| 34 A L 1 Ⅲ | } 跛輪形土製品 |
| 35 A K 1 Ⅲ | } 三角形土製品 |

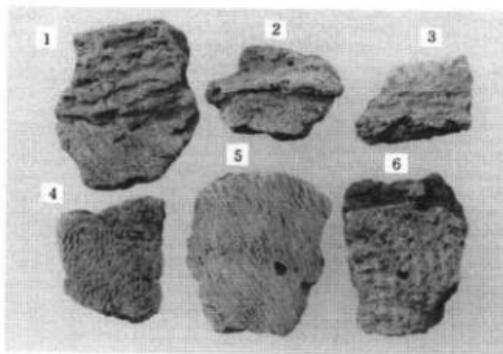
☆ (29~35) → 「十腰内式」



(前期・中期の土器) 第1・2群土器

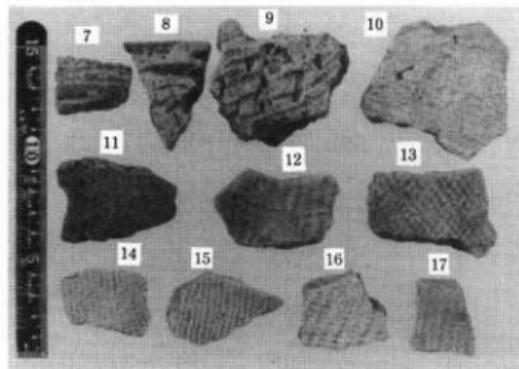
P・P・L 1

1 AN1b-B1Ⅱ
2 AN1b-B1Ⅱ
3 AN1b-A2Ⅱ
4 AN1b-B1Ⅱ
5 AN1b-B1Ⅱ
6 AN1b-B1Ⅱ



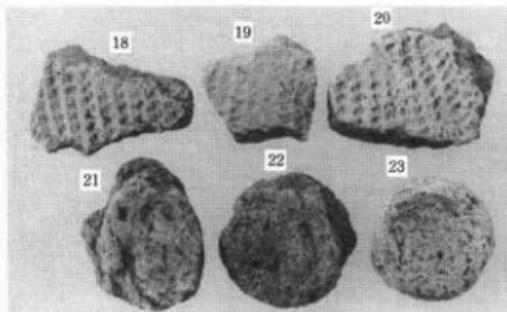
☆(1~6) - 第1群
土器「前期」

☆(7~11) -
第1群土器
☆(12~17) -
第2群土器



7 N12Ⅱ
8 AN1b-B1Ⅱ
9 AN1b-B1Ⅱ
10 AN1b-B1Ⅱ
11 AN1b-B1Ⅱ
12 AL1Ⅱ
13 AN1b-A2Ⅱ
14 AN1b-B1Ⅱ
15 AN1b-B1Ⅱ
16 AN1b-B1Ⅱ
17 AN1b-B1Ⅱ

18 AN1b-B1Ⅱ
19 AN1b-B1Ⅱ
20 AN1b-A2Ⅱ
21 AN1b-B1Ⅱ
22 AN1b-B1Ⅱ
23 AN1b-B1Ⅱ

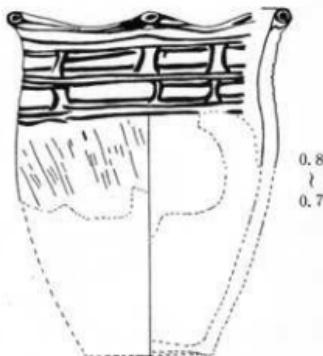


☆(18~23) - 第1群
土器、(但し21~23)
は底部である。



AK 2 II

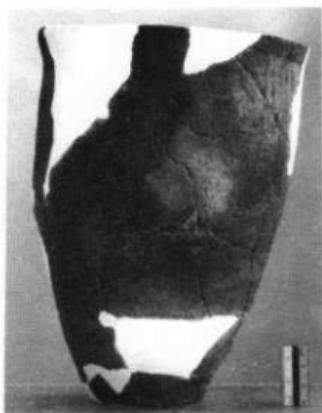
- 15.0 -



〔後期の土器〕第3群土器-24

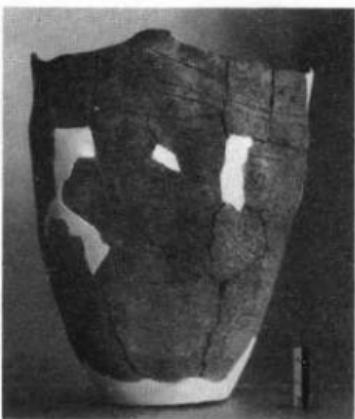
☆ (24) は、AK 2 II出土の「十腰内I式」斐形土器である。

- このものの器形は、口縁は波状で、ゆるい突起をもち、口頸部がゆるやかに外反し、肩部が丸味をもつ器形で胴下半は、欠失したものである。
- 施文は、頸部に2条、肩部に3条、胴部中央上に3条の沈線文があり、これらの沈線文に区画される間には、瓜形の沈線が2条逆方向に施文され、この相対する瓜形文を連結する沈線も施文される。
- 色調は、外面灰褐色、内面黒色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。



25

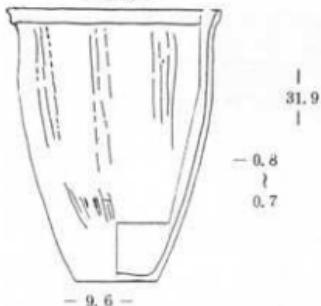
AL1 II



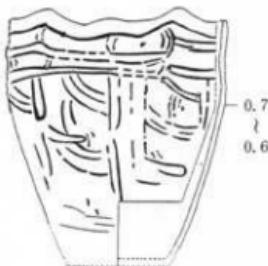
AN1-B1 II

- 25.1 -

- 25.6 -



- 9.6 -



また、口縁は折返えし口縁

〔後期の土器〕第3群土器-25・26

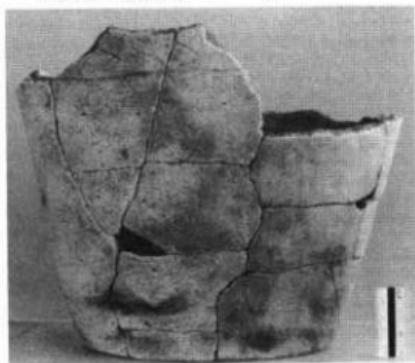
☆ (25・26) は、AL1 II・AN1 b-B1 II出土の「十腰内I式」甕形土器である。

- (25) は、口縁が平縁で折返えし口縁をもち口頸部が外反し、肩部下がややふくらむ器形で底面が上げ底を呈する。
- (26) は、ゆるい山型突起が4こ付く波状口縁で、前者と同様、口頸部がゆるく外反し、肩部がまるくふくらむ器形で、底部が欠失している。
- 施文は、(25) は、3条を基本とした綫位の沈線文が、4か所施文されるものである。
- (26) の施文は、2～3条の沈線文を基本とし、口頸部には、平行沈線と瓜形文、肩部下には、平行沈線と綫位に垂下する沈線、弧状に曲線を描く沈線文が施文されるものである。これらの沈線文を施文した後に、器表面を整形したものらしく、沈線文の溝がつぶれている箇所も認められる。
- 色調は、(25) は外面暗褐色、内面灰黑色、(26) は外面灰黑色、内面赤褐色を呈する。(25・26) とも胎土・焼成はやや悪くもろい。

〔後期の土器〕第3・4群土器

☆第4群土器下半部

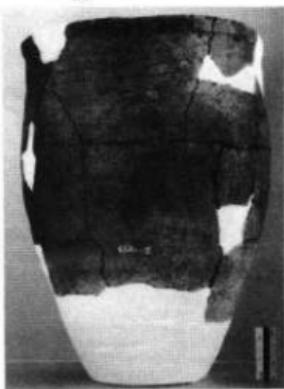
27



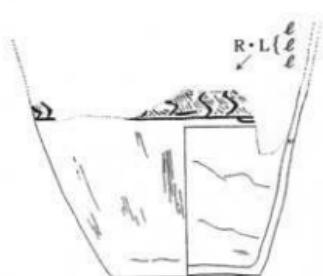
AN 1 b - B 1 II

28

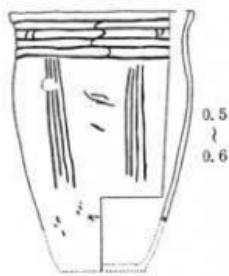
P・P・L 4



AL 1 II
- 24.0 -



- 18.7 -



〔後期の土器〕第3群土器-28、第4群土器-27

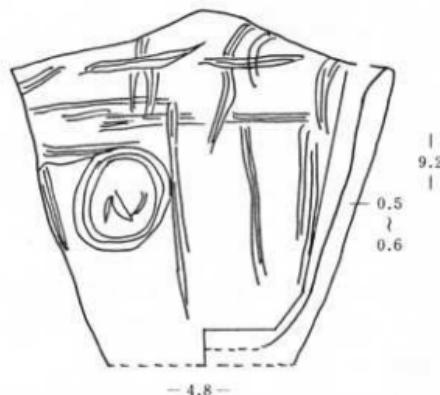
☆ (27・28)は、それぞれAN 1 b - B 1 II出土の「十腹内I式」→(28)、および「十腹内I式」、「同II式」の間を埋める土器-27で、大形深鉢、および大形深鉢か壺形土器胴下半部のものである。

- ・ 器形は、(28)は、口縁は平縁で口頸部がゆるく外反し、肩部は丸味をもつもので底面は欠失している。(27)は、胴下部のもので上半の器形は不明であるが、底面は、上げ底を呈する。
- ・ 施文は、(28)は、口頸部に5条の沈線文があり、S字状の沈線が縦位に各沈線文を連結しているもので、その左右に瓜形文が施文されるものである。また肩部下～胴部には、4条の垂下する沈線文が施文される。(27)は胴中央下に縄文と縦位の電光形(鋸歯状)の施文がある他は無文である。
- ・ 色調は、(27)は外面赤褐色、内面黄褐色、(28)は、外面灰褐色、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成は(27)は良い。(28)はやや悪くザラザラするものである。



AK 2 Ⅲ

- 10.1 -



- 4.8 -

〔後期の土器〕第3群土器-29 (粗製)

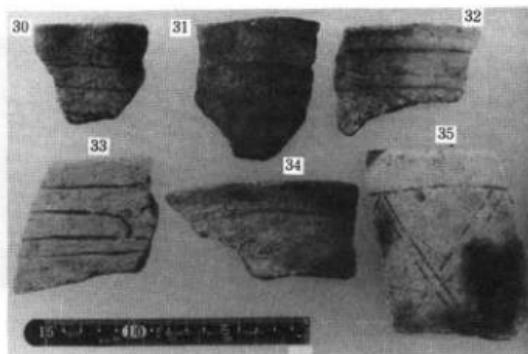
☆ この鉢形土器は、A地区K2 グリットⅢ層出土の「十腰内Ⅰ式」土器である。

- このものは、波状口縁で小突起を一ごとに有するものである。
- 施文は、細い沈線によって円形文等が施文されるもので、沈線は3条を一对とするものである。
- このものの色調は、外面灰黒色一部黄褐色、内面黄褐色一部黒色を呈し、胎土には、砂粒を含み、焼成は良いが、ややもろいものである。

〔後期の土器〕第3群土器

P・P・L 6

- 30 AL 1 II
- 31 AN 1 b - A 2 II
- 32 AK 2 II
- 33 AL 1 II
- 34 AK 1 II
- 35 AL 1 II



☆ (30~43) → 第3群「十腰内」式
深跡形土器

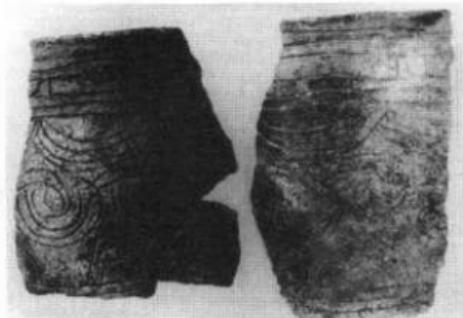


- 36 AL 1 II
- 37 AK 1 II



- 38 AK 2 II
- 39 AK 2 II
- 40 AK 1 II
- 41 AK 1 II
- 42 AK 1 II
- 43 AK 2 II

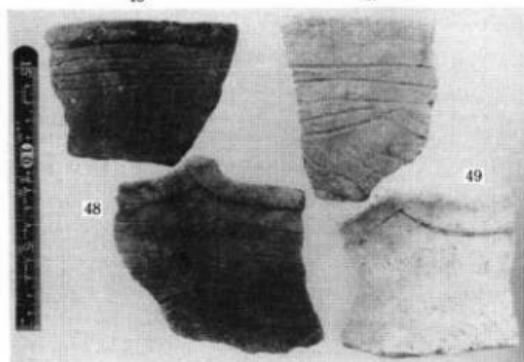
- 44 AK 1 I
- 45 AK 1 I
- 46 AK 1 I
- 47 AK 1 I
- 48 AK 2 I
- 49 AK 1 I



45

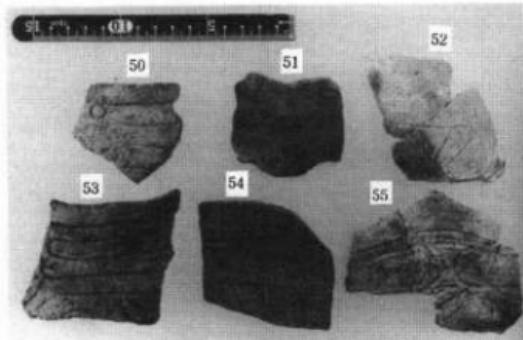
46

47



☆(44~55) - 第3群「十腰内I式」
深鉢形土器

- 50 AK 1 I
- 51 AN 1 b - A2 I
- 52 AL 1 I
- 53 AK 1 I
- 54 AN 1 b - A2 I
- 55 AK 1 I

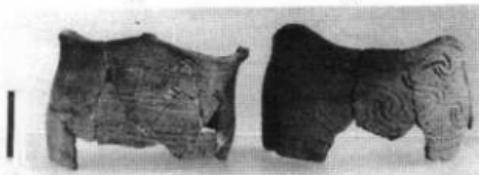


〔後期の土器〕第3群土器

P・P・L 8

56

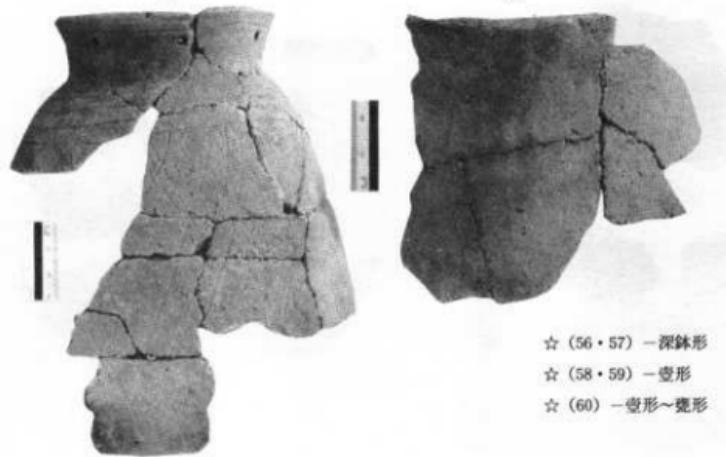
57



56AK1 I
57AK1 I
58AL1 II
59AK2 II

58

59



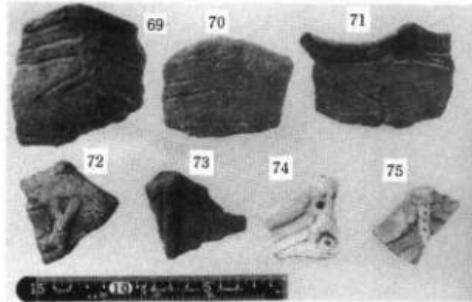
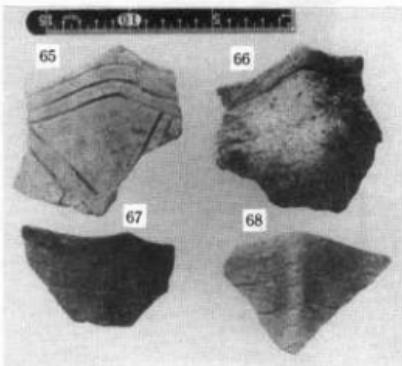
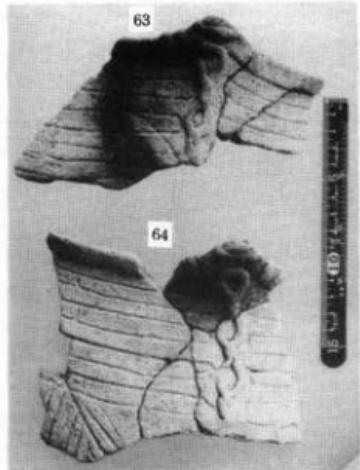
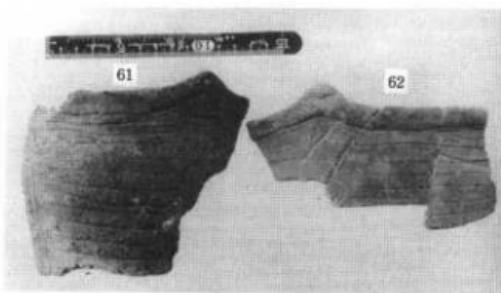
☆ (56・57) - 深鉢形
☆ (58・59) - 壺形
☆ (60) - 壺形～壺形

60



60AK1 I

- | |
|-------------|
| 61 A K 2 II |
| 62 A L 1 II |
| 63 A K 2 II |
| 64 A K 2 II |
| 65 A K 1 II |
| 66 A K 1 II |
| 67 A L 1 II |
| 68 A K 1 II |

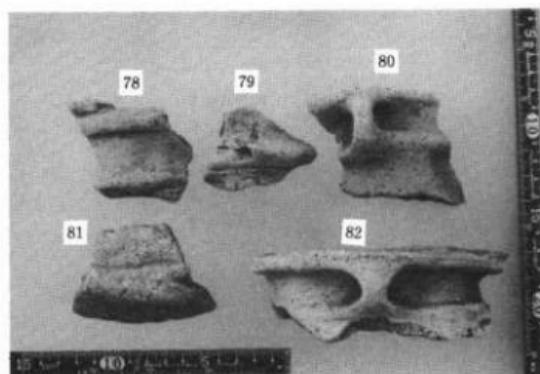
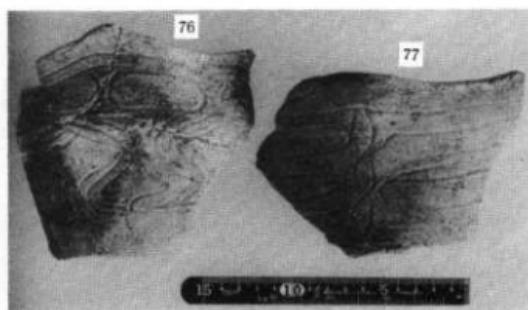


- | |
|-------------------|
| 69 A K 2 II |
| 70 A K 2 II |
| 71 A K 1 II |
| 72 A K 2 II |
| 73 A N 1 b - B II |
| 74 A K 2 II |
| 75 A L 1 II |

〔後期の土器〕 第3群土器

P・P・L 10

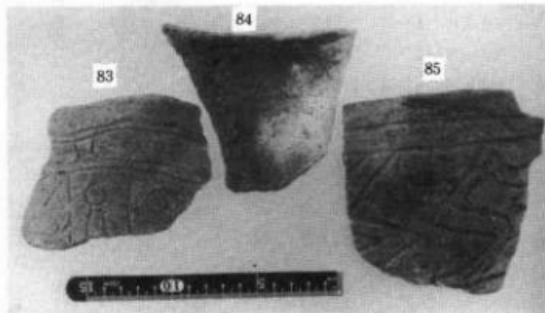
- 76AK 1 II
- 77AK 2 II
- 78AN 1 b-B II
- 79AN 1 b-B II
- 80AK 2 II
- 81AN 1 b-A 2 II
- 82AN 1 b-B 1 II



☆ (76・77, 83~85) - 深鉢形

☆ (78~82) - 器台

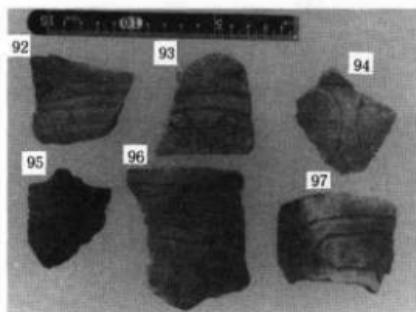
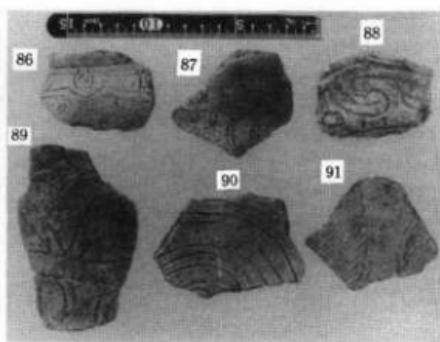
- 83AL 1 II
- 84AL 1 II
- 85AL 1 II



〔後期の土器〕第3群土器

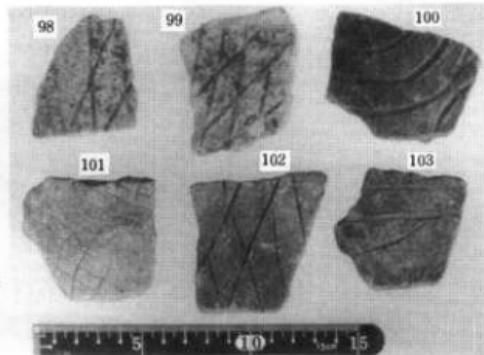
P・P・L 11

- 86 A K 2 II
- 87 A K 2 II
- 88 A K 2 II
- 89 A L 1 II
- 90 A N 1 b - B II
- 91 A L 1 II



- 92 A N 1 b - A II
- 93 A K 2 II
- 94 A N 1 b - A II
- 95 A L 1 II
- 96 A L 1 II
- 97 A K 2 II

- 98 A K 1 II
- 99 A K 1 II
- 100 A N 1 b - B 2 II
- 101 A N 1 b - B 2 II
- 102 A K 1 II
- 103 A N 1 b - B 2 II



☆ (86~103) 第3群「十腰内I式」土器

〔後期の土器〕第3群土器（鉢形）

P・P・L 12

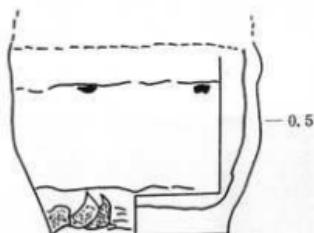


AK 1 II 下

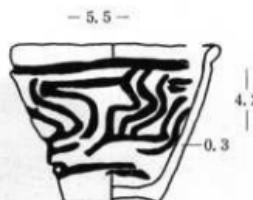
AK 1 II

104 AK 1 II 下

105 AK 1 II



- 4.6 -



- 2.5 -

〔後期の土器〕第3群土器—104・105

☆ (104・105) は、AK 1 II 出土の「十腰内Ⅰ式」鉢形土器である。

- (104) は、上半欠失のため全体器形は不明であるが巻き上げ手法による成形とみられる接合痕が認められ、底面は、平底である。

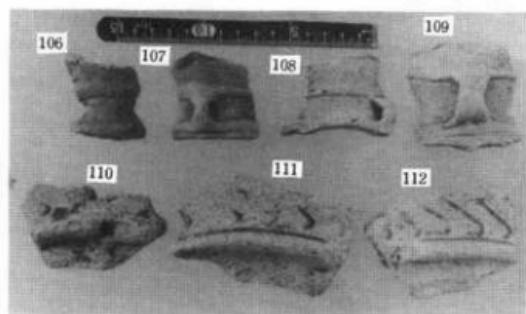
(105) は、小形の鉢形土器で袖珍土器である。このものの底面は、上げ底である。

- (104) は、無文で (105) は、口縁下に沈線文、胴下部に沈線文があり、その間に垂下する「波状文」が施文されるものである。胎土・焼成は、(104) は悪く、(105) は良好である。

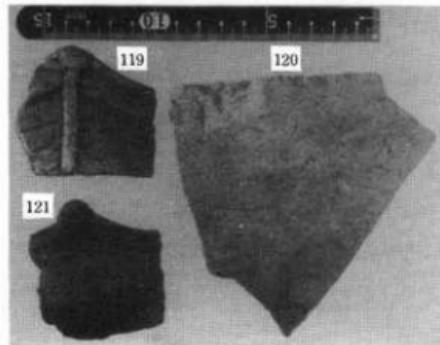
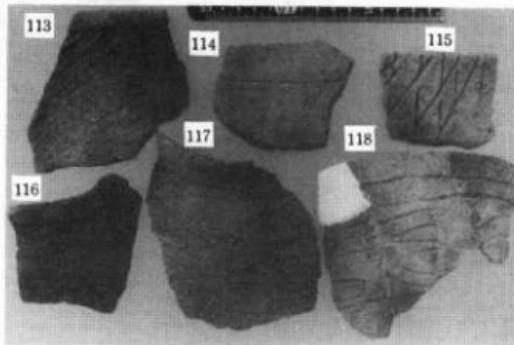
〔後期の土器〕第3・4群土器

P・P・L 13

- 106 AK 1 II
- 107 AK 1 II
- 108 AK 1 II
- 109 AK 1 II
- 110 AL 1 II
- 111 AL 1 II
- 112 AL 1 II



- 113 AK 1 II
- 114 AK 1 II
- 115 AK 1 II
- 116 AK 2 II
- 117 AK 2 II
- 118 AK 2 II



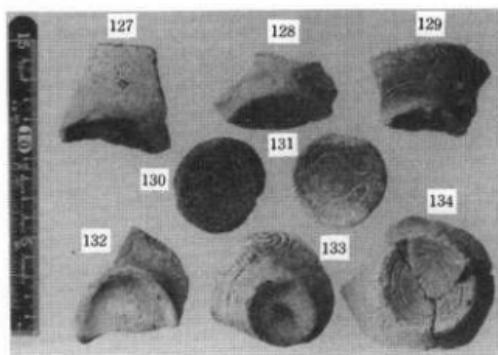
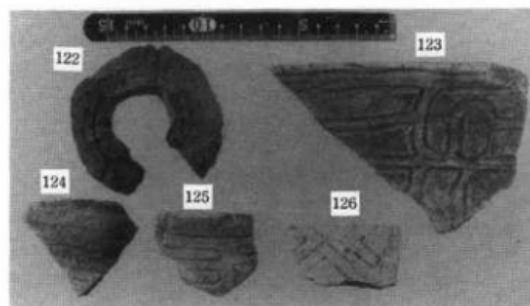
- 119 AL 1 II
- 120 AL 1 II
- 121 AL 2 II

☆ (106 ~ 109) - 器台 (第3群土器)
 ☆ (110 ~ 112) - 器台 (第4群土器)
 ☆ (113 ~ 120) - 深鉢 (第3群土器)

〔後期の土器〕第3・5群土器（底部を含む）

P・P・L14

- 122 A L 1 ■
- 123 A L 2 ■
- 124 A L 1 ■
- 125 A L 1 ■
- 126 A L 1 ■



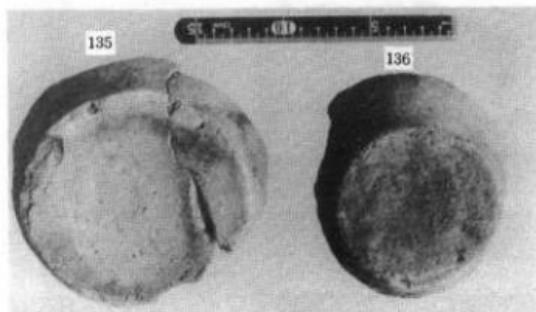
- 127 A K 2 ■
- 128 A L 1 ■
- 129 A K 2 ■
- 130 A L 1 ■
- 131 A L 1 ■
- 132 A K 2 ■
- 133 A K 1 ■
- 134 A K 2 ■

☆ (122) - 第5群壺形土器

☆ (123 ~ 126) 第3群土器

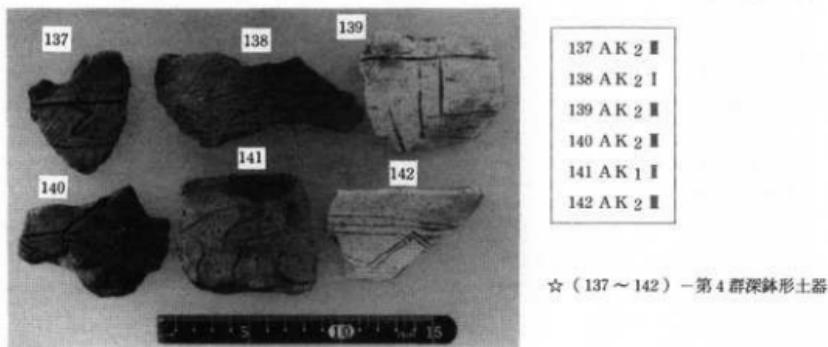
☆ (127 ~ 136) 第3群土器底部

- 135 A 2 ■
- 136 A L 2 ■

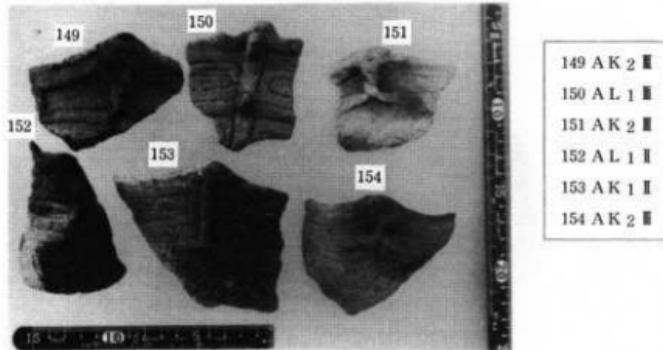
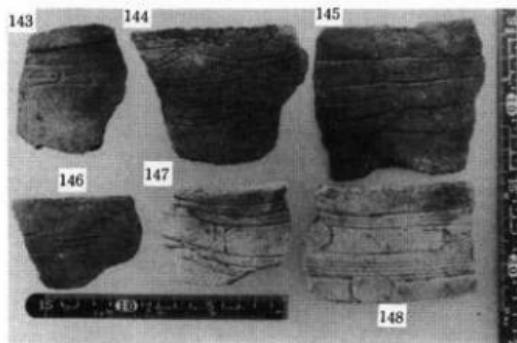


〔後期の土器〕第3・4群土器

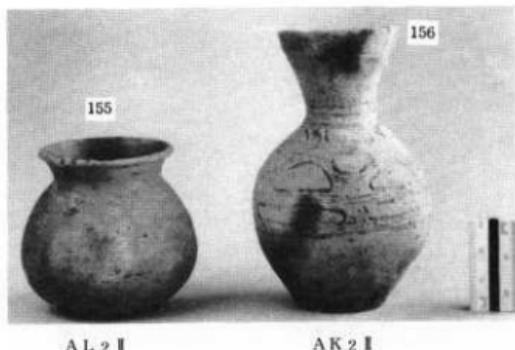
P・P・L 15



- 143 AK 1 II
- 144 AK 1 II
- 145 AK 1 + 2 II
- 146 AK 1 II
- 147 AK 2 II
- 148 AK 1 II



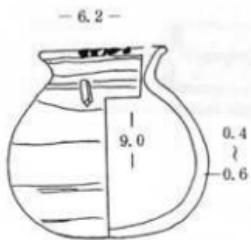
- 149 AK 2 II
- 150 AL 1 II
- 151 AK 2 II
- 152 AL 1 II
- 153 AK 1 II
- 154 AK 2 II



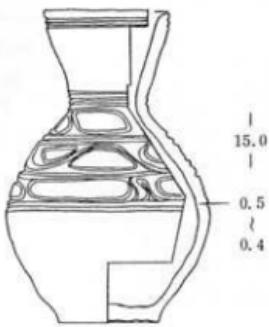
AL 2 II

AK 2 II

- 6.2 -



- 6.2 -



- 4.8 -

〔後期の土器〕第3群土器-156、第7群土器-155→(精製)

☆ (155) としたものは、A地区L2 グリットⅡ層出土の「大洞C2式」壺形土器である。

- このものは、口縁に刻目を有するもので、肩部に粘土粒を一回縦位に付すほかは、無文で、器表面は平滑なものである。色調は、内外とも灰赤褐色を呈し、胎土、焼成とも最良である。

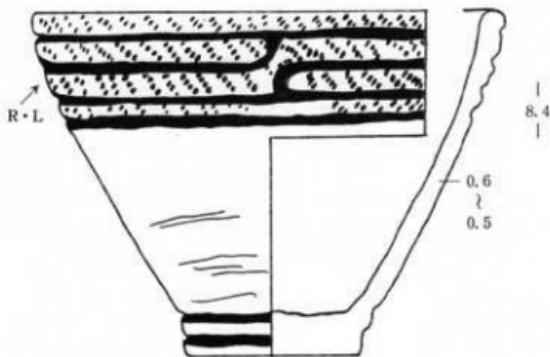
☆ (156) は、A地区K2 グリットⅡ層出土の「十腰内Ⅰ式」壺形土器である。

- このものは、平縁で細く長い口頸部をもち、沈線による3段の施文があるもので、底部はやや上げ底を呈する。色調は、赤褐色一部黒色を呈し、胎土には砂粒を含むが焼成は良く堅緻である。



AK 1 II

-13. 4 -

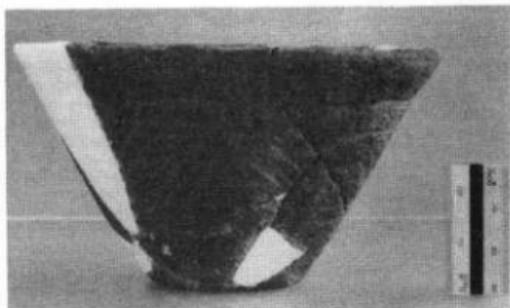


〔後期の土器〕第4群土器- 157

☆ (157) は、AK 1 II出土の「十腰内Ⅰ式」と「十腰内Ⅱ式」の中間に位置する土器である。

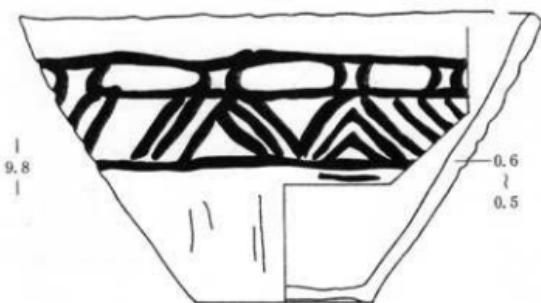
この土器は、どちらかと言うと第4群の中では、「十腰内Ⅰ式」に近いものと考えられる。

- ・ 器形は、平縁で、口頸部がやや内傾気味のもので、底部が高台状に直立する形状である。また、底面は平底である。
- ・ 施文は、口縁下～胴上部に4条の沈線文があり、その2本目の沈線が、上下の沈線に曲って連結するものである。また、底部上にも2本の沈線文が施文される。上部の施文は、第3群土器にも一パターンとして認められるものである。
- ・ 色調は、白灰褐色で、明るい色調を内外ともしており、胎土・焼成とも最良で、重量のあるものである。



A L 1 II

- 17, 6 -

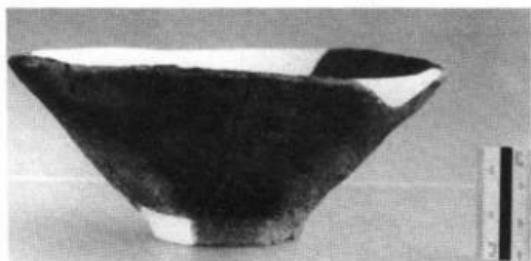


- 6. I -

〔後期の土器〕第4群土器—158

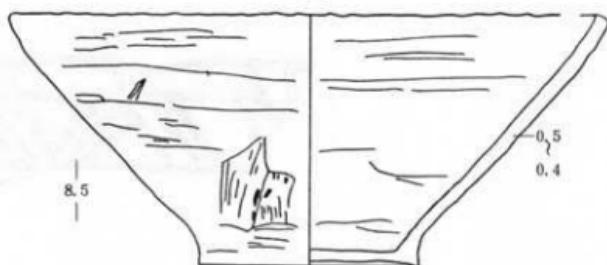
☆（158）は、A L 1 II出土の「十腰内Ⅰ式」と「同Ⅱ式」の中間型式をなす鉢形土器である。

- このものの器形は、底部より口縁に向って斜行して開く器形で口径が大きく、特徴のある器形で、底面は上げ底である。
- 施文は、口頸部が無文帶で、肩部に2条、胴中央下に1条の沈線文がめぐり、これらの沈線によって区画される施文帶には、相対する爪形（半月形）の施文と、「重山形文」が施文され、胴下半は無文帶をなすものである。
- 色調は、外面灰黒色、一部火を二次的に受けて赤褐色を呈する。また、内面は赤褐色である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。



A L 1 II

-20. 2-

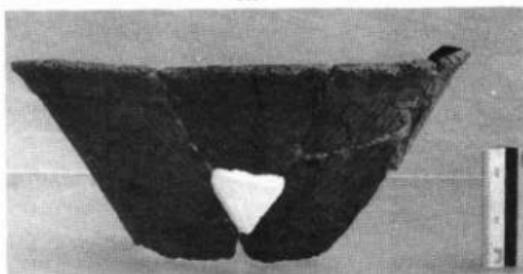


- 7.5 -

〔後期の土器〕第4群土器—159

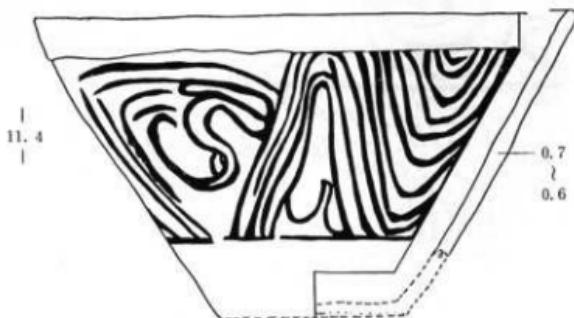
☆ (159) は、A L 1 II出土の「十腰内」式」「同II式」の中間に位置する型式の鉢形土器である。

- 器形は、口縁部の径が大きく、底部から口縁に向って大きく開く器形で、底面は上げ底である。
- 施文は無いもので、器外面は横方向に整形されている。特に底部直上には、削った整形が認められる。
- 色調は、外面灰黒色、下半黒褐色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。
- 第4群とした土器は、無文帶を持つのが一つの特徴として把握される。



AK 1 II

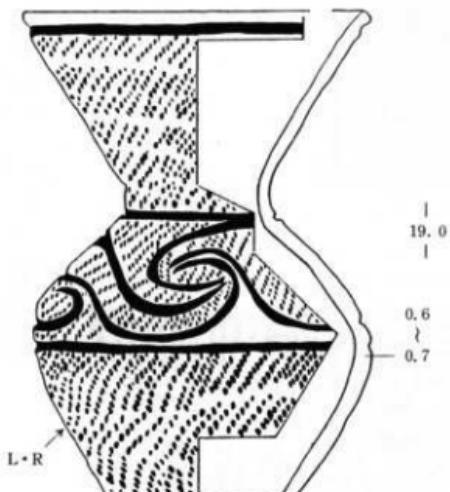
-20. 6 -



〔後期の土器〕第4群土器—160

- ☆ (160) は、AK 1 II 出土の「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」の中間型式の鉢形土器である。
- ・ 器形は、口縁径が大きく、底部より口縁に向って開く器形である。なお、このものは「折返し口縁」である。底面は欠失しているため不明なるも上げ底と推定される。
 - ・ 施文は、「折返し口縁」が無文帶で、肩部～胴下位が施文帶をなす。この施文帶には「重山形文」と、「十腰内Ⅰ式」土器群の名残りを見せる曲線文が施文される。なお胴下位は無文帶をなしている。
 - ・ 第4群とした中間型式の土器群における施文パターンは、〔無文帶－施文帶－無文帶〕というパターンがあるよう観察される。
 - ・ 色調は、内外とも赤褐色、一部暗赤褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

-13. 2 -



- 6.7 -



AK 2 II

〔後期の土器〕第5群土器—161

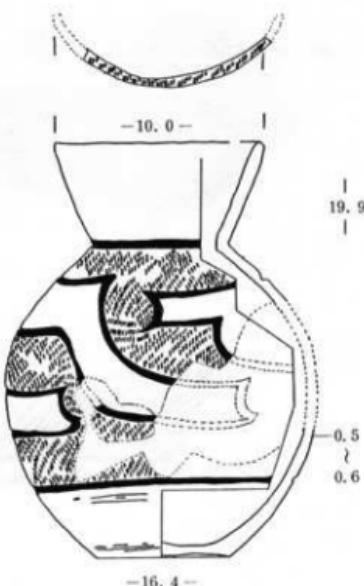
☆ (161) は、AK 2 II出土の「十腰内II式」後葉の壺形土器である。なお本遺跡では、この類の出土は無く、本年（第七次）が最初である。一応「十腰内II式」後葉としたが類例を待って再考したい。

- ・ 器形は、口径が大きく直線的にしづまる鉢形状の口頸部をもち、肩部が張らず、最大幅が胴部中央にある器形で、底面は上げ底を呈する。
- ・ 施文は、口縁直下に沈線文が1条、肩部上に1条、胴部中央に1条施文され、胴部上半の施文帶には、曲線による沈線文が入組み状に施文されるものである。
また、口縁下より底部まで左下りの縄文がある。
- ・ 色調は、外面灰白褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

162



AK 2 II



-16.4-

〔後期の土器〕第4群土器-162

★ (162) は、AK 2 II 出土の「十腰内」式と「同」式の中間型式であるとされる壺形土器である。

- 器形は、頸部から口縁へ向って斜行する口頸部をもち、口縁は平縁である。胴部～底部へかけては、球形をなすもので底面は、上ヶ底を呈する。
- 施文は、頸部下に1条、胴下部に1条の沈線文によって施文帯を区画し、球形の胴部には、先端が瓜形になる右下りの曲線が2条平行して施文されるものである。また斜行繩文が充填されるものである。
- 色調は、灰白褐色を呈し、内面は暗褐色を呈する。胎土・焼成は最良である。